

写真で残す

# 萩の郷

下市田区・公民館下市田支館

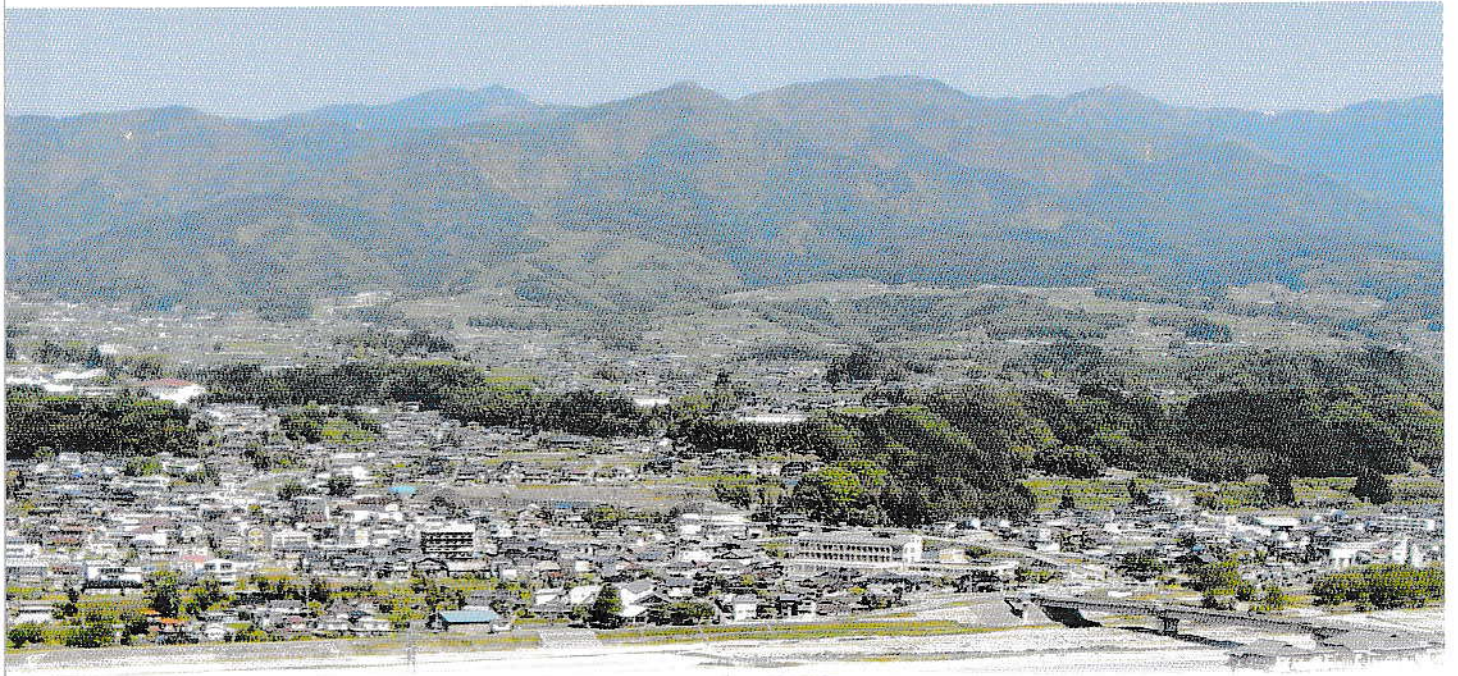


はるかはるか昔の  
知恵や技や感性が、  
連綿と受け継がれて  
生きています。  
先人たちが魂をそそいで  
作りあげた物や事が、  
今も、そのままの姿で  
暮らしています。



写真で残す

# 萩の郷



## 目次

ごあいさつ	4
一区 地図	6
①市田の宮 ②高森町満蒙関係殉難者慰霊碑	7
③矢の根塚 ④大丸山の土壘・堀切遺構・狼煙台	8
⑤十王堂 ⑥雲井橋	9
⑦羽根の秋葉大権現の塔 ⑧羽根の古墳と柵・常梅	10
⑨山の神・蚕玉神（耕地の祭り） ⑩塚越の塚（北原一号古墳）	11
⑪北村の秋葉山大権現・金毘羅大権現 ⑫郷蔵	12
⑬道標（資料館前・瀬高・塚越） ⑭久保田延陣還暦自賛歌碑	13
⑮三六災の置き土産羽根坂の橋 ⑯柏の大樹	14
⑰古御屋	15
二区 地図	16
①庚申供養碑 ②蠶玉様浮き彫り像碑	17
③南無阿弥陀佛 ④龜甲石	18
⑤水天宮 ⑥橋供養碑	19
⑦柵 ⑧弘法大師座像	20
⑨本棟造り ⑩稻荷大明神	21
⑪富士山碑 ⑫長野県農業試験場下伊那分場跡地碑	22
⑬道標 ⑭道標	23
⑮道標 ⑯天白	24
⑰聖観世音菩薩像碑 ⑱道祖神	25
⑲金毘羅大権現碑 ⑳秋葉大権現碑 ㉑金山彦尊神碑	26
三区 地図	27
①秋山神社 ②旧下市田学校	28
③旧下市田公民館 ④御射山社	29
⑤宝篋印塔 ⑥上沼元仙筆塚	30
⑦間ヶ沢の蚕玉様 ⑧十三塚	31



⑨ 安養寺の十王様 ⑩ 梵網経(町文化財指定) .....

⑪ 忠魂碑 ⑫ 恩師小川昌成先生頌徳碑 .....

⑬ 法塔 ⑭ 大庭天白 ⑮ 間ヶ沢の道標 .....

⑯ 下の宮荒神社 ⑰ 枝垂れ桜・榎の木(登録天然記念文化財指定) .....

**四区 地図** .....

① 松岡城址 .....

② 秋葉大権現・金毘羅大権現 ③ 馬頭観世音 .....

④ 清水庵(観音堂)と十王様 ⑤ 清水庵廻国巡礼塔 .....

⑥ 倉屋敷・古屋敷跡 ⑦ 青面金剛 .....

⑧ みちしるべ ⑨ 巡礼沢砂防工事完成記念碑 .....

⑩ 市場石 ⑪ 申原重松頌徳碑 .....

⑫ 雲龍山松源寺 ⑬ 銚子ヶ洞の山の神 .....

⑭ 猿田彦大神 ⑮ 蚕玉大神 .....

⑯ 新井のシャゴジ ⑰ 上洞のシャゴジ .....

**五区 地図** .....

① 武陵地第一号古墳 .....

② 廻国巡礼塔・道祖神の碑 ③ 道標 .....

④ 護摩堂 ⑤ 青面金剛 ⑥ 青面金剛 .....

⑦ 武陵地天白 ⑧ 日限地藏 .....

⑨ 秋葉大権現 ⑩ 坂牧城址 .....

**六区 地図** .....

① 災害復興記念碑 ② 水神(①・②・③・④・⑤) .....

③ 出砂原の六地藏 ④ 出砂原の大石 .....

⑤ 三界萬霊碑 ⑥ 供養塔 .....

⑦ 母子健康センター跡 ⑧ 斉藤茂吉の歌碑 .....

⑨ 大井の取り入れ口 ⑩ 築堤記念碑 ⑪ 亀甲石 .....

下市田の古道(善光寺道・秋葉道) .....

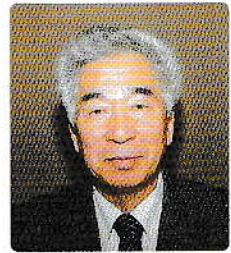
変わり行く萩の郷 .....

編集委員紹介・編集にあたって .....

68 60 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32

## 発刊のことば

下市田区長 林 稔



この度『写真で残す萩の郷』写真集が発刊の運びとなりました。厳しい世界情勢の昨今、むしろ地方では、伝統や文化を重視した価値観や習慣、産業、産物を大切にしようとする気運の高まりを感じる時、この『写真で残す萩の郷』写真集が発刊されますことは、郷里を再認識する上で意義あることと嬉しく思う次第であります。

萩の郷に点在する史跡や文化財はその数が多く、その一つひとつは先人の願いや祈りが込められた尊い遺産であり、これを保存し後世に残すことは、私達の故郷を知り、育てていく原点であります。地区の繁栄を願い、連綿と受け継がれてきた先人の想いに改めて感銘する一方で、その想いを現代の感覚に重ね合わせて後世に継承する意義は大きくあります。

この事業は公民館下市田支館長を中心に、史談会、古文書研究会、写真撮影等の皆様にご協力を仰いで、百枚余もの展示用写真パネルと共に、写真集として萩の郷の文化財を文献に残す画期的な事業となり、完成をみるに至ったのであります。

時代は移り変わっても故郷を想う気持ちに変わりなく、この一冊には、過去から現代という時間を超えた郷土愛が集約されています。発刊を契機に更なる萩の郷の発展を願い、新たな出発点になることを心から祈念します。また、この写真集が史跡巡り等、萩の郷の歴史を学ぶ一助になればさらに幸せに思います。

最後にこの大事業にあたり、献身的なご尽力を頂きました大勢の関係皆様方、ご提案を頂きました故・富田元区長様に心よりお礼を申し上げ、発刊のことばといたします。

## 発刊のことば

公民館下市田支館長 松岡修二



『写真で残す萩の郷』写真集が発刊に至りましたのは、平成20年12月に急逝された富田隆仁元区長さんが19年度の、『萩の郷ふれあい広場』で、「数年前に義理があつて他町村の公民館に伺った時、その地区の歴史が一目で判るそんな写真の飾りつけがあつた。数多い展示写真は圧巻で、地元歴史にふれた思いで感激した。萩の郷も是非、この区民会館に写真で残すことを検討してみてほしい」とのお話からでした。

昭和49年6月、高寿会の発足15周年の記念誌『萩山乃さと』が発刊されました。その20年後、平成6年4月に『萩山のさと』第二集が史談会より発行されております。区報『萩の郷』は昭和59年1月の創刊で、『区報・館報』と名称は変わりましたが年二回の発行で、現在72号まで続き、今年度で丁度25年目となりました。それぞれ各誌には区内の歴史遺産など貴重な記録が数多く掲載されております。

萩山の郷には残したい、後世に継承していかなくてはならない尊い財産が数多くあります。支館では区民の皆さ

んにこれらの史跡や文化財等を再認識していただければと平成11年から文化祭りに併せて地域巡りをし、見識を深めてきております。

提言をいただき支館では準備期間を経て区三役、史談会の皆様、地域の先輩の皆様にご協力いただき事前協議を重ね、夏の暑い時期からの写真撮影と同時に解説文の作成をお願いし、20年度の文化祭り時に区民会館内への写真展示を終了、披露する事ができました。

その見事な写真を目の当たりにした時、是非これらを写真集にして区民の皆さんに配布したいとの意見が出て、史談会の皆様が数多くの写真を各区毎に整理され、さらに地域の変遷記録や位置図面を加え、立派な写真集に仕上げてくださいました。ご尽力に厚くお礼申し上げます。縁あってこの節目に発行された本誌も他誌同様お手元に未永く保存願ひ、ご家族皆様でご利用いただければ幸いです。経過の報告を述べ発刊のことばに替えさせていただきます。

## 発刊によせて

下市田史談会会長 蜂谷睦雄



将来に向けて画期的な事業、「写真で残す秋の郷」写真集が、下市田区ならびに公民館下市田支館によつて編集、発刊の運びとなった事に、先ずは敬意と感謝を申し上げます。

史談会としては区、支館からの要請により及ばずながらのご支援を申し上げ、その責任を果たしたわけですが、その方面に深い知識をお持ちの方々にとっては、ご不満の点多いかと思ひます。読後の感想ご批判を、是非ともお寄せ頂きたいところであります。

さて私共は、地域を知り尽くしているようで、深いところまでの理解をしていないのが普通ではないでしょうか？殊に足下に転がつていたり、目の前に建立されていたりする石神石仏（石造仏）、更に視野を広げ地域の成り立ち（歴史的事実）について考えたとき、言い過ぎかとは思ひますが、無知と言つてもよい程の実情の中で、今回のような記念誌が発刊された事の意義は大きいと思ひます。

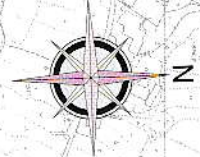
今に生きる私達の責任は、現在の地域の実情と、地域の歴史的推移を後世に如何にして残すかが大切かと思ひます。その中の一部だけでも、こうした立派な写真集となつて今回残される事は、区民にとっては有難い事業だったのではないのでしょうか。

この写真集が区民各戸の座右の書物として大切に扱われ、写真集を携え、一家で地域巡りに発展する事に寄与できたとすれば、発刊の趣旨に添うものになるのではないかと思ひます。是非とも活用して頂くことを願ひと同時に、発刊に思ひつた故人及びそれを実行された区、ならびに支館に対して改めて感謝申し上げます。

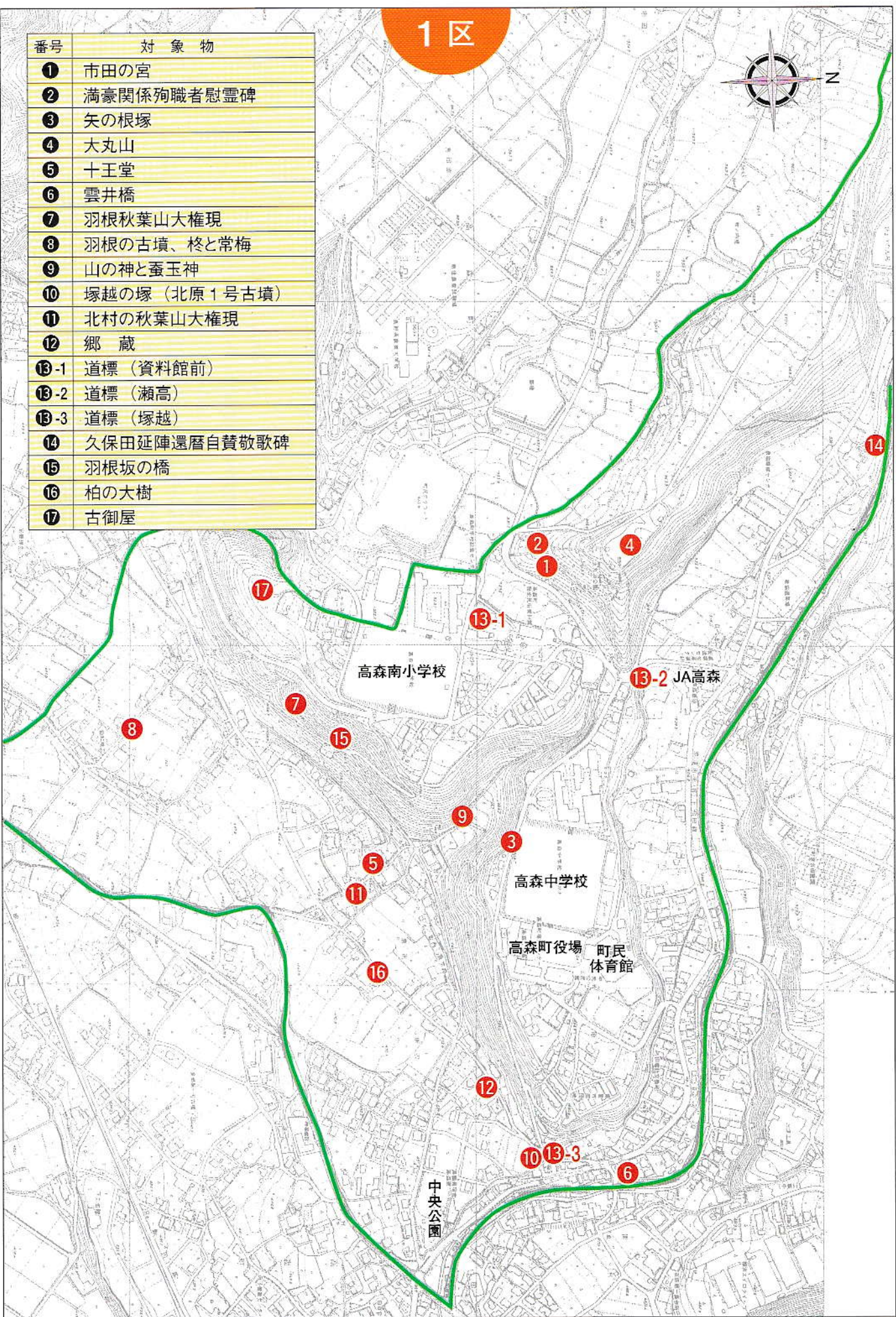
前述致しました通り、下市田を知るほんの一部だと思ひますので、何らかの形で続編が出版される事を期待し、発刊のお祝いを申し上げます。



1区



番号	対象物
①	市田の宮
②	満豪関係殉職者慰霊碑
③	矢の根塚
④	大丸山
⑤	十王堂
⑥	雲井橋
⑦	羽根秋葉山大権現
⑧	羽根の古墳、柁と常梅
⑨	山の神と蚕玉神
⑩	塚越の塚（北原1号古墳）
⑪	北村の秋葉山大権現
⑫	郷 蔵
⑬-1	道標（資料館前）
⑬-2	道標（瀬高）
⑬-3	道標（塚越）
⑭	久保田延陣還暦自賛歌碑
⑮	羽根坂の橋
⑯	柏の大樹
⑰	古御屋



# ① 市田の宮 いちだのみや

昭和31年(1957)創建  
〔所在地〕大丸山の南斜面

昭和12年(1937)に始まった日中戦争第二次世界大戦までの犠牲者276名を祀る。春秋の年2回の祭りをしてきたが、45年後本殿が傷んだため平成14年(2002)4月27日『戦没者慰霊之碑』と刻んだ石碑に祀り替えた。

文字 長野県民族会長 西村 正氏  
施工者 駒ヶ根市 矢野工業産  
施主 山本脩平(高森町市田地区遺族会長)、  
遺族一同  
委員8名、監事2名、遺族会理事会  
名簿 地区毎にある



戦没者慰霊碑



市田の宮

# ② 高森町満蒙関係殉難者慰霊碑 まんもうかんけいじゆんなんしゃいれいひ

昭和56年(1981)4月建立  
〔所在地〕大丸山南斜面 市田の宮の西

満蒙の天地に民族協和による榮土建設という日本民族の理想と、国土防衛という使命達成のために推し進められた重大国策により、600余名が満蒙に渡り、昭和20年(1945)の敗戦により血と汗の結晶は一瞬にしてついで去った。町中で実に270余名の未だ還らざる遺骨のある中で35年が過ぎた。町内全戸及町外関係者からの浄財により、慰霊碑を建て殉難者の御霊を合祀し、安らかに眠られんことと、再び繰り返さないことを誓ってこの碑を建立する。と碑陰にある。

昭和56年(1981)4月 高森町満蒙関係殉難者慰霊碑建設委員長 林 小六  
遺族及生還者一同  
長野県知事 吉村午良 書  
石工 山岸貞夫 上原大次 松尾勝司



慰霊碑

### ③ 矢の根塚

〔二区〕

〔所在地〕 中学校前の駐車場東端



矢の根塚の祠

現在高森中学校の建っている一帯は昔は山だった。

松喰い虫のため伐られた松の根っこの南側に、小さい祠がある。明治（1868〜1912）の中頃この山を開墾して桑畑とした。その時、このあたり一面から矢の根石や石器等が出てきたり、古代人の住居跡も出てきた。そこでここを矢の根塚というようになり、倉澤安市さん方では先代よりここに祠を建て「公分明神」を祀ってきたそうである。

公分明神という神は、神之峯城主の知久様と関係のある神様で、二つばかりのお話が伝承されている。



矢の根塚の周辺風景

### ④ 大丸山の土塁・堀切遺構・狼煙台

〔二区〕

〔所在地〕 大丸山

松岡城の本城と支城（吉田）との中間にあつて、堀切の奥（約30m）東に、監視所と狼煙台があつたのではなからうか、といわれている。

大丸山は町のほぼ中央に位置しており、都市計画の一環として、事業費一億二千五百万円をかけ、昭和五十三年（1978）に着工し、五年ほどかけて公園を造成した。

芝生の西端の凹地は中世の空堀ではないかと言われるが、今後の調査がまたれる。



大丸山狼煙台跡地



大丸山の遠景

# ⑤ 十王堂

「二区」

【所在地】  
唐沢の北沢幸保氏宅前道路ぎわ

十王とは、亡くなった人が生前にどんな罪を犯したかを冥土で裁く、次の十人の王である。

秦広王（7日目）・初江王（27日目）・宗帝王（37日目）・  
伍官王（47日目）・閻魔王（57日目）・変成王（67日目）・  
太山王（77日目）・平等王（百日目）・都市王（一年目）・  
五道輪廻王（三年目）と、阿弥陀様（情けをかける）、三途の川を渡ってきた亡者の着物を脱がす脱衣婆、その衣類を天秤に掛けて調べる懸衣翁、人頭杖（男女の頭のついている杖、男は見る、女は嗅ぐ）、鏡に写して観る浄玻璃の鏡がある。

その南に宝永4年（1707）9月・天保13年（1842）6月・天明3年（1783）2月、他5基の石仏がある。  
※三区の安養寺の十王様を参照する。



十王堂の十王様

堂の脇の石仏八体



十王堂の遠景

# ⑥ 雲井橋

「二区」

【所在地】中塚市郎氏宅の東側にある橋

## ■名付けの由来

昭和3年（1928）頃、木の橋から今のコンクリートの橋になった。  
明治4年（1871）に木橋を広げて架け替えたとき、清東の吉川権九郎氏が多大な木材を出してくれた。

粋な人で、飯田の二本松に通い「雲井」と言う馴染みの女がいて、橋代のお礼にこの女の名前をつけてくれ、と言うことでこの橋の名が付いたという。



雲井橋



雲井橋の遠景

## 7 羽根の秋葉大権現の塔 あきば だいごんげんとう 「二区」

享和2年(1802)正月吉日建立

〔所在地〕道路拡張工事で三度の移動

- ①南信給食センター北側に建立
- ②新井氏宅入り口へ
- ③羽根坂へ

町史編纂の折には銘文がわからなかったが、羽根坂線に移動した際に、牛牧の秋葉塔より30年古く、町内で一番古いことが判明した。静岡県の秋葉山に火伏せの神である「火之迦具土神」を祭る秋葉神社があり、同じ山に秋葉寺があった。ある時、この寺の住職であ



羽根秋葉塔



秋葉塔の近景

る「三尺坊」が天狗となって空を飛び、火を鎮めたという噂が広まり、両者が一つになって秋葉大権現となり、全国に信仰が広まる。ところが戦国時代になると、「火之迦具土神」

は剣難を防ぐ神であると信じ、また寺には勝軍地蔵が祭られているという噂から武将達は戦勝を祈願するなど、信仰が拡大していた。

戦い終わって江戸時代(1603~1867)に入ると、生命・財産の保護に関心が高まり、木造住宅の集落を形成している江戸から全国に信仰が拡大することになる。地方ならではの講を作り、代参などをしていたが参拝に行き交う人が絶え間なくいつの間にか秋葉道(街道)と名付けられた。やがて塔を建て、祈願など信仰を深めて来たのであろうと思われる。

秋葉大権現に関係ある分社等は2万数千社とも言われる。町内には塔は併記、並立単独碑等35基有余存在する。

## 8 羽根の古墳と柎・常梅 こふん ひいらぎ とここうめ 「二区」

〔所在地〕中村忠敬氏宅内

推定直径直径16mの円形古墳。その中央に柎が植えてあり古木である。常梅は樹齢1000年余り、8月中旬まで落果しない。昭和20年(1945)代まで葉として収穫していた。特に苦味がきつい。開花は12月~2月、花の香りが高い梅である。



中村氏宅の遠景



古墳にある柎

やま かみ こ だま かみ  
**9 山の神・蚕玉神** (耕地の祭り) 「二区」

【所在地】唐沢洞 北澤理勝氏宅西



山の神・蚕玉神の石段

北澤理勝氏宅上の唐沢洞の石段の上に祠がある。日露戦争以来休んでいたが、昭和7年(1932)唐沢の災害復旧工事完成祝いを機に昭和8年(1933)52軒の北村耕地全家庭が参加して祭りを再会している。現在は27軒である。

石段左側に「明和元年12月(1754)の刻みがある。」

山の神石段の刻字



大山祇神・蚕玉神



遠景

つか こし つか  
**10 塚越の塚** (北原一号古墳) 「二区」

【所在地】北島剛氏家の前

南側に石室の入口と思われる2本の石が1mほどの間隔で斜めに立っている。中塚市郎氏は子どもの頃石室の中へ入って遊んだと言う。故北澤金八氏も生前に同じ話をされていた。松の大木が3本と柵山桜等が鬱蒼としていて道を通る人は恐れていたと言う。

塚上には北澤家の氏神と天満宮が祀られている。町史に埴輪と直刀が出たと記されている。

北原二号、三号古墳は積善会館の付近にある。



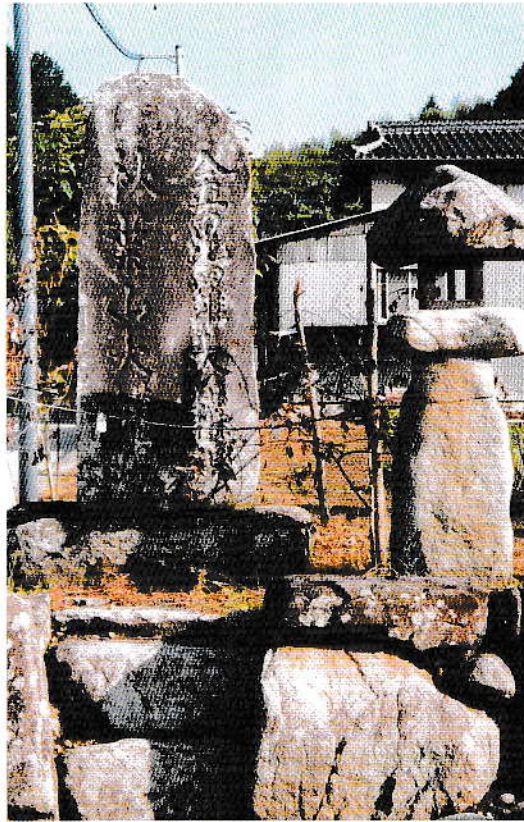
塚越の塚(北原一号古墳)



古墳の遠景

北村の あきばさんだいがんげん・こんびらだいがんげん  
**11 秋葉山大権現・金毘羅大権現** 二区

文政11年(1828)  
 【所在地】上沼啓孝氏宅裏、河田豊子氏宅西



秋葉大権現・金毘羅大権現



同じ塔としては町内では大きい部類にはいる。  
 右側「文政十一歳(1828)次戊子四月吉辰」  
 左側「管家唯一秘伝  
 大師正統二十九世知積第一座道本謹書印」



遠景

郷蔵  
**12 郷蔵** 二区

明治35年(1902)移築  
 【所在地】北澤善二郎氏宅裏(五間、四間半、高さ三間半) ※間(六尺)・尺(三十三cm)

元は三区荒神様の西北約100mの所にあつて、江戸時代後期から村の備蓄米、租税米を収めた蔵(納所)であった。米千俵詰め込めたという。  
 明治35年(1902)に北澤善四郎(当主より三代前)が払い下げてもらい(買い)移築したものである。  
 現在は二階に改めて使用しているが空間に柱はない。



郷蔵



郷蔵の遠景

13 道標 (資料館前) (瀬高) (塚越) 「二区」

【所在地】歴史民俗資料館前、瀬高宅裏、塚越



瀬高氏宅裏  
北善光寺道  
東舟渡道  
南座光寺道



資料館前  
歴史民俗資料館入口、給食センター前  
北せんくわうし (善光寺) 道  
東ふなと (舟渡) 道  
南さくわうし (座光寺) 道



塚越の塚北 木下正夫氏宅北  
右さかうし道 (座光寺)  
左あきは道 (秋葉)

14 久保田延陣還曆自賛歌碑 「二区」

文政10年(1827)建立

【所在地】久保田昌幸氏宅裏氏神の右

『やれそれと思ふ間もなく六十こえ  
弥がふところは今みそじほど』

当主昌幸氏より四代前のお爺さんで飯田の歌詠みの人に教わっていたらしい。一区唯一の歌碑である。

歌碑のある遠景



久保田氏還曆自賛歌碑

15 三六災の置き土産 羽根坂の橋 「二区」

はねさか はし

昭和39年(1964)

【所在地】羽根坂と学校道(北村)との合流点付近

昭和36年(1961) 6月24日〜30日の豪雨は町内に多大な被害を与えた。死者9名、行方不明2名、家屋流出42戸、全半壊63戸、堤防の決壊、耕地の流失300ヘクタール、橋の流失、道の決壊等二十世紀最大の被害であった。

一区においても、大島川の決壊、唐沢洞、江戸ヶ沢の氾濫等、特に南小学校の東校庭より溢れた出た雨水が、南小より旧学校への道の流れ、一区の中央部、南部を流れ落ちたため被害は大きかった。

羽根坂の道を約10m、深さ約5mえぐってしまった。その置き土産として架けられたのが「羽根坂橋」である。



南小学校下の羽根坂橋

16 柏の大樹 「二区」 【所在地】北村の中村家の北口

かしわ たいじゅ

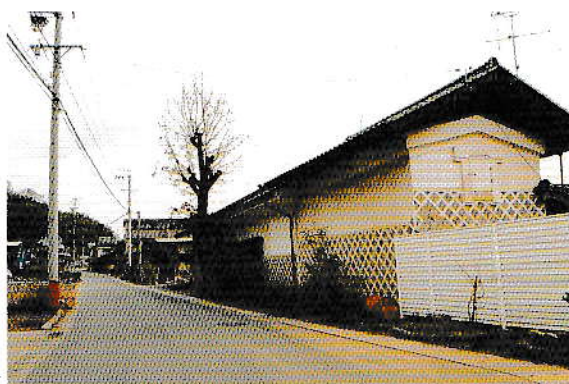
樹齢約140年といわれている。樹周1:

8m、高さ約14m

中村家は勇蔵忠篤、与三衛門忠孝、平九郎の三代に亙って寺子屋を開いている。寺子たちにおやつとして、特に節句等に柏の葉に餅を包んで与えたと、伝えられている。



柏の大樹



柏の大樹遠景

# 17 古御屋

〔二区〕〔所在地〕高森南小学校南側、山林の中

松岡城支城の一つ、見張り所である。帯曲輪には監視兵がいたと思われる。土塁が高い。

一段下にお姫様の化粧水と言われる井戸がある。(蜂谷家の氏神境内)

城址碑建立(昭和52年(1977) 陽寿好日 光澤北澤両家建立)

現、光澤・北澤家の所有による30坪前後の氏神社用地は、もともと光澤金治氏の所有であった。以前は社背面西側の谷川までと、前面中間段境までの相当地籍を所有し、今川家、北澤家、蜂谷家の地所に隣接していた。

光澤金治氏の長男が東京において大学卒業直前の不慮の事故で急逝後、時を経て昭和39年(1964)に氏神社用地以外の大部分を高森町他に譲渡し、同時に当用地を当家から光澤一統に譲り受けた。一統の氏神がいつの時点から祀られたかは定かでないがそれより相当前のことと思われる。



古御屋城址碑



古御屋城址碑の近景

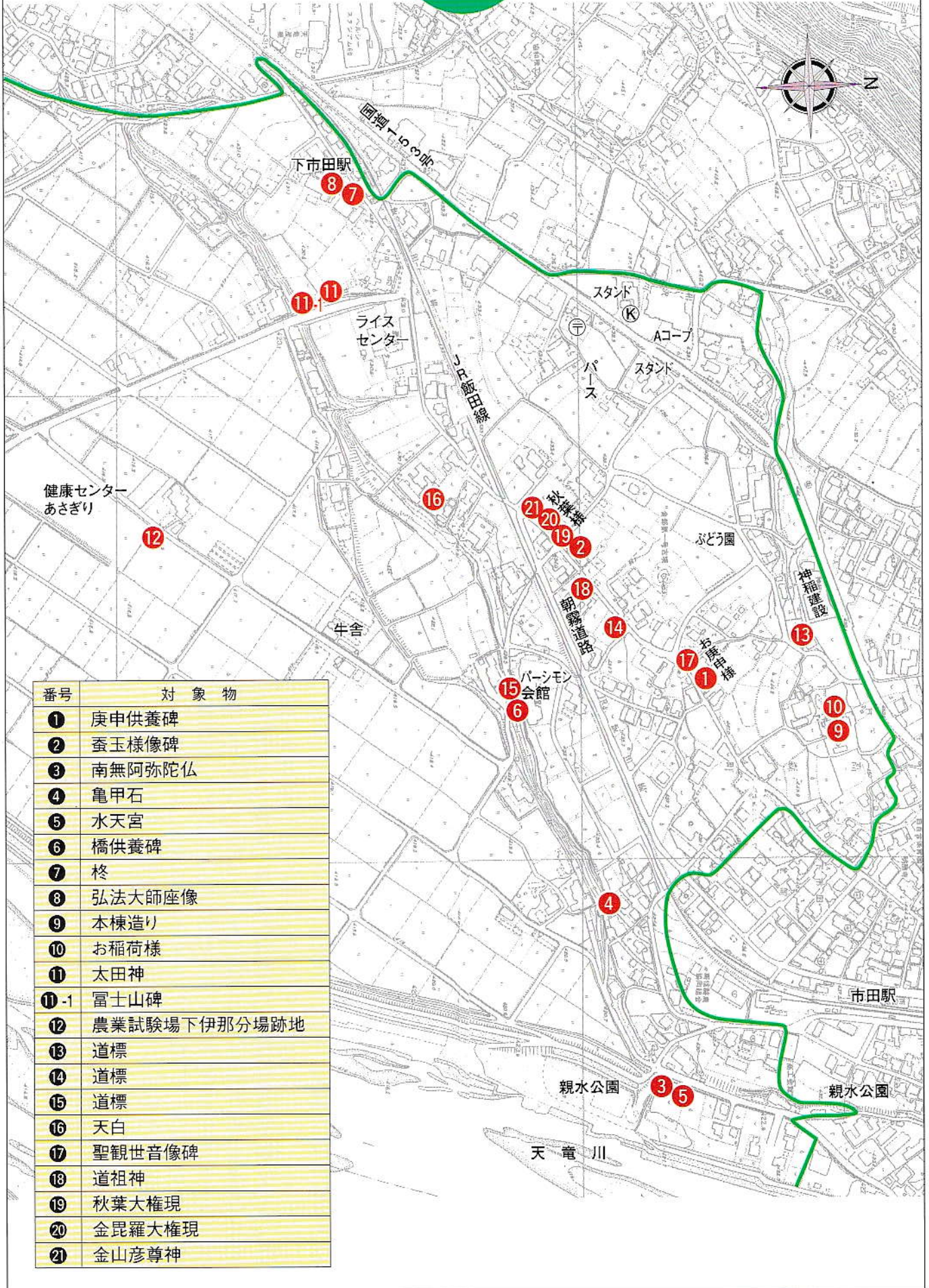
社の隣の「史蹟古御屋城址」なる石碑建立は、当時の一統代表が話し合っ  
て、そういうものを建てようかとまとまり、特に町への依存も無く、自主的  
自費によって行われた。材料の石柱は、北澤理勝氏が以前からそのつもりで  
準備したものが氏宅にあり、飯田市砂弘の馬場田石材店に光澤正晴氏が手配  
して製作した。碑文の揮毫は光澤勝男氏が瑠璃寺の僧正と親交があつて依頼  
した。建立作業は一統の老若出合つて行われた。

もう一方の東側にある「古御屋之霊」なる石碑建立の経緯は定かでない  
が、その位置が従前光澤金治氏所有であったことと、建立が高森町他へ譲渡  
の時より相当に前であることから、氏を中心と同様の経緯があつたのことと  
思われる。以後現在まで、氏神祭の折りには欠かさず慰霊し祀っている。  
(光澤金良氏調査)



古御屋城址の古井戸

## 2区



番号	対象物
①	庚申供養碑
②	蚕玉様像碑
③	南無阿弥陀仏
④	亀甲石
⑤	水天宮
⑥	橋供養碑
⑦	柁
⑧	弘法大師座像
⑨	本棟造り
⑩	お稻荷様
⑪	太田神
⑪-1	富士山碑
⑫	農業試験場下伊那分場跡地
⑬	道標
⑭	道標
⑮	道標
⑯	天白
⑰	聖観世音像碑
⑱	道祖神
⑲	秋葉大権現
⑳	金毘羅大権現
㉑	金山彦尊神

# ① 庚申供養碑

「区」

元禄9年(1696)9月7日建立  
 「所在地」大沢操氏宅裏



庚申供養碑



庚申供養碑の遠景

庚申というのは、干支の庚と申の重なる日のことで、60日に1回まわって来る。中国から来た信仰で、この夜眠っている間に、その人の体内に居るといふ、三戸さんどと言ふ虫がいて、この虫が飛び出し、その人の悪事を天帝に告げるといふ。

そのために信者が集まって「青面金剛」を祭って寝ずに日の出を待つ、これを「お日待ち」と言い、このような庚申信仰が盛んになると、お日待ちだけでなく「庚申供養塔」の建立にまで発展し、各所に塔が立ち、町内にはこの信仰に關係ある石造物は実に1300有餘存在するようである。その中でもこの塔は下部に猿が三匹刻まれ、元禄9年(1696)の建立で町の中では古いといわれている。

# ② 蠶玉様 浮き彫り像碑

「区」

文化4年(1807)6月建立  
 「所在地」上原修氏宅前

蚕玉様碑には、文字碑と浮き彫り像碑の二種類あるが、此処の碑は郡下最大と言われ、浮き彫り像碑である。右手に桑の枝を持ち、左手に宝珠を持つ機織りの守護神である。同時に蚕の供養塔として養蚕に携わる農家によって建立されたものである。神様の名前は、蚕玉様・蚕霊塔・絹笠大明神等二十二種類以上がある。また祀り人により異なり、神像系と仏像系の二種類がある。



蚕玉様碑の遠景



蚕玉様碑

### ③ 南無阿弥陀佛 なむあみだぶつ

嘉永7年(安政1年)甲寅年(1854)仲秋吉日建  
 【所在地】下市田河原旧惣兵衛堤防北端

宝暦3年3月(1753年)中村惣兵衛によって完成した。大川除けは、惣兵衛堤防と名付けられ、以来下市田河原等を天竜の出水被害から護ってきた。そのため、中村惣兵衛築堤完成後100年を記念し、併せて惣兵衛没後90年となるため、惣兵衛の偉業を讃えると同時に、惣兵衛の供養を兼ねて建立された。建立場所の堤防は三六災害により流失したが、幸いにも堤防の一部と、供養碑は残されたが、供養碑は西方へ10m程移されている。



南無阿弥陀佛



碑のある場所の遠景

### ④ 亀甲石 きっこういし

【所在地】下市田河原 中村實氏宅の下段南

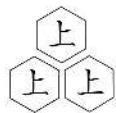


亀甲石

所謂、下の亀甲石と言われている。中村惣兵衛は堤防を築くために土地の境界を三ヶ所定め、それをもって測量基点とした。

此処の亀甲石は三ヶ所の測量基点のうちの一つで、「下の亀甲石」と言われている。石の表面には、亀の甲羅模様の中に「上」の字が深彫りされている。

この甲羅模様は、時の飯田城主堀候の家紋である三ツ盛一重亀甲に因んだうちの一つの中に「上」の字を刻印したものである。



三ツ盛一重亀甲



亀甲石のある遠景

# 5 水天宮すい てん ぐう 二区

嘉永3年(1850)建立  
 【所在地】松島恒男氏宅下

水天宮 (総本宮、福岡県久留米市瀬下町鎮座)

御祭神は、

天御中主大神あまのなかつまのおみ、安徳天皇たかくらひらちかう、高倉平中宮たかくらひらちかう、建礼門院けんれいもんいん(二

位の尼)の四神由来は、

寿永4年(1185)源平の壇ノ浦の戦いで平家、利あらずと見るや、建礼門院(二位の尼)は八才の安徳天皇を抱かれて入水し共に命を落とされた。このご両人を、高倉平中宮に仕えていた女官が伊勢の方まで逃れ、水天宮として祀ったと伝えられている。

この水天宮碑は惣兵衛堤防が完成した百年後の嘉永3年(1850)に建立されたが、昭和36年の大水害で堤防が決壊した時に、本流に流され見失っていたが、平成5年に工事中水中より発見され、平成8年に現在地に再建されたものである。  
 (五区にも水天宮がある)



水天宮



水天宮の遠景

水天宮は京都の仁和寺にわじと深い関係があり、「宮」は皇室とも関係し貴重な碑であるが、由緒については省略する。

# 6 橋供養碑はし ぐよう び 二区

宝暦13年(1763)建立  
 【所在地】北原洲平氏墓地内(自宅裏)



橋供養碑

橋供養碑が建立されている下あたりまで天の中川(天竜川)が流れていたり、時には淵を造っていたりしていた。この辺りに渡船場が設けられていて、対岸の伴野とを舟又は水量の少ない季節には土橋・木橋が設けられ、双方の村人や旅人の往来に供されていた。

このように橋は人馬の往来や荷物の運搬には欠かせないので、安全に往来ができるよう橋の靈に祈願したり、また不幸にして流失した橋の供養をも兼ねたりしていた。



橋供養碑のある遠景

# 7 柎

二区

1400年代の宝永末期植樹(推定)  
【所在地】福島照義氏宅前

樹種「柎」(モクセイ科)、所在地下市田1401番地、所有者上沼清一、樹高約7m、幹周囲約7・7mであったが、今はその姿はない。

柎は、暖地に育つ常緑樹で、若木の葉は鋸のようなギザギザがあるが、上部の古い枝の葉には無い。葉はツヤがあり大変厚い。木質は固いため、将棋の駒、算盤玉、印材などの材に使用されている。

この柎の古木は県下でも珍しく、昭和37年7月12日に県天然記念樹に指定。樹齢600歳と記されている。この場所に柎の古木がある由縁について概略を記すと次のようである。

室町時代・明徳5年(1399)但馬の国(兵庫県)豊岡城主細川清家の子清俊が今の地に落ち着き、その場所が沼地であったため「上沼」と名乗り、松岡から拝領した領有地の堺として、羽根・武陵地・流田の三カ所に柎を植えたが、うち二本は枯死又はひこばえによって今に至っている。

現在は、残念ながら主幹は枯れ、その根本より新しい枝の繁茂が始まっている。何れにしても福島照義氏の理解ある協力あつての事である。



柎の大木



柎遠景

# 8 弘法大師座像

二区

宝暦13年(1763)建立

【所在地】福島幸雄氏宅



弘法大師座像

大師座像は台座の高さ約6cm、大師座像約30cm余の高さで、お厨子に納められている。

大師は仏の尊称であると同時に、朝廷から高僧に賜る敬称で、弘法大師を除き23人が居られる。中でも大師というと、真言宗開祖の弘法大師(空海)を指す場合が多く、その徳を慕う信者で大師講をつくり、心身を磨き仏教「真言宗」の道に励んだ。空海は香川県(讃岐)の出身で、平安初期の立派な高僧である。遣唐使として唐の長安に渡り、帰国後に高野山に金剛峰寺を建て、京都の東寺と共に真言仏教の道場とし真言密教の布教につとめた。

福島幸雄氏宅に所蔵されている理由は、宅地東側段丘の突端に薬師堂があり、そこにお薬師様が文政2年以前(1819以前)に祀られ、更に弘法大師像も安置されていたが、天竜川氾濫の折りに崩落、流失の危険があったので、現在の宅地南側の屋敷続きに移転。明治初年(1870頃)排仏毀釈の流れの中で、この薬師堂も取り壊される羽目になり、堂内のお薬師様と弘法大師座像は長年にわたる堂守りの庵主様の面倒を見ていた福島氏に、そして同じ場所に祀ってあった十二神将は安養寺の十王堂にと、それぞれ納められたと言ひ伝えられている。

# 9 本棟造り ほんむねづく

二区

安政2年(1855)卯9月吉日建築  
 【所在地】松島美智子氏宅



本棟造の全景

潜り戸くぐりが残り勾配も緩やかで、平面は正方形に近く、本棟切妻(妻入)造りで、大屋根が典型的なものである。

間口7間、奥行7.5間、建ち18尺、勾配3寸2分、流れ寸法25尺である。鬼瓦は手造りで、横6尺、高さ約3尺の大きな物が残っている。この鬼瓦に築造年が刻印されている。

下市田にも本棟造りの民家が各所に見られるが、改造などにより潜り戸が残っている民家は少ないと思われる。

〔参考〕  
 本棟造りの民家は、松本を中心として北は大町辺り、南は飯田付近まで広がっており、他の地方には全く見られない独特の姿である。

吉田に国の重要文化財に指定されている竹ノ内家の本棟造りがある。



# 10 稲荷大明神 いなり だいみょうじん

二区

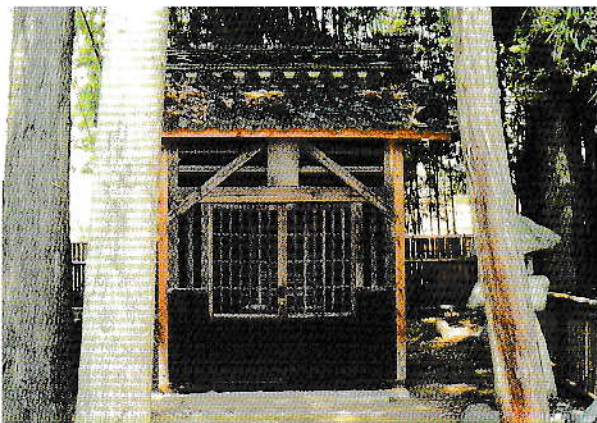
文久4年(1864)甲子年2月23日  
 【所在地】松島美智子氏宅

京都の稲荷山に鎮座する伏見稲荷大明神の「倉稲魂神」ウカノミタマを祭神とする。

五穀を司る神で中世以降は、農耕の守護神としてでなく、商工の神として信仰が拡大して、有名となった豊川稲荷神社がある。江戸では専ら町内安全とされ、各地に分社を持ち、信仰を拡大してきた。稲荷は狐の異名で稲荷の神の使いとされ、狐は稲荷と切り離せない関係にある。狐を神とする思想は中国から伝えられ、日本では奈良時代(710-714)からこの思想があつたと言われている。

この稲荷は伏見稲荷で、松島家四代前の伊三郎氏が、文久4年(1864)に、戸田吉左衛門家重、工匠荒井竹四郎信広の二人によって建立されたと記されている。

〔追記〕  
 稲荷は稲生の意で田の神で穀物を主宰する神とされ、寺や家庭の守護神としてもまつられていることがある。



稲荷大明神

# ⑪ 富士山碑 (浅間)

二区

安政6年(1859)3月  
 〔所在地〕 相ノ澤 西村東一郎氏宅裏の竹藪



富士山碑

一口に言うとう富士山を霊山として崇め、木花咲邪姫を祀り、山伏の姿で修業する山岳信仰である。

江戸時代の初期、富士山で荒行を行った修験者が教義を打ち立てた。この教義をもって教徒を組織化し、江戸中期に入ると江戸を中心に信越、東海、東北地方までその信仰は広がっていた。又は中道巡り等が成就した記念として富士山を模した富士塚や、記念碑を建てる習慣があった。

また富士山を神格化したものとしては、「仙元大菩薩」「浅間大神」「参明藤開山」などを刻んだ碑を建てた。こうした事から推測するとこの附近に信仰者、或いは富士講があり、参拝記念として碑を建てたものと考えられる。  
 ※文政(1818~1836)のころ、飯田の松下千代が熱心な信者となり、伊那谷に布教したとも伝えられる。

# 太田神碑

〔所在地〕 相ノ澤 西村東一郎氏宅裏の竹藪内



庚申信仰碑と同じ意味を持つ文字碑である。



西村氏宅裏の竹藪

# ⑫ 長野県農業試験場 下伊那分場跡地碑

二区

昭和59年(1984)10月建立  
 〔所在地〕 坂牧久男氏宅前

跡地には当時の門柱(石造り)が残っている。なお、碑の裏面には概要が次のように書かれている。

当分場は大正15年4月に創設された。以来幾多の変遷を経て、昭和50年8月角田原に園芸なども含め、関係施設を移転、現在に至っている。此処に関係者の協力を得て、由緒ある実験台を用いて銘を刻み、創立当時の門柱と共にこれを建立する。昭和59年(1984)10月、高森、南信農業試験場60周年、記念事業実行委員会とある。

なお、跡地には社協運営の「健康センター」が建立され、町民の健康増進に広く役立っている。



試験場跡地に建つ碑



試験場跡地の遠景

13 道みち

標しるべ

二区

【所在地】松島修三氏宅前



西方に向いているべきものが工事によって東に向けられてしまった。位置も西側へ移動している。

神稲建設駐車場の石垣に東に向いて建てられている。向かって左に「左あきは道」、右に天明5（1785）、更に右側面に「大沢」と刻まれている。

道標に固有名詞があるのは珍しい。下に四軒の大沢姓があるので、その中の誰かが秋葉参りの人たちの便を図って建てたものと思われる。

この道標は明らかに向きが逆になっている。出原方面から旅人のための案内であるので、道路下に西向きに建てられていたものが、道路工事によって現在の位置に移されている。



道標の周り

14 道みち

標しるべ

二区

【所在地】大澤順二氏宅前



道標の遠景

秋葉参詣と飯田への案内である。古くから建てられていた馬頭観音を利用し、左に「左あきは道」、右には「右い、た道」と刻まれている。

この道標は「田村線」沿いにあり、出原方面からの旅人に対する道案内である。左の里道（秋葉道）を下ると渡船場（北原州平氏宅北）に着く。また、田村線沿いに西南に行けば飯田へと向かう。高さ約78cm、幅約61cmの立派なものである。



# 15 道

## 標

二区

【所在地】北原洲平氏宅上

所謂、旅人の道案内のために建てられたものである。

この道標（道しるべ）は、河東から善光寺参りに行く旅人の道案内として建てられたもので、その向きは東に向いて、「右せんこう志道」と刻まれ、その左には「馬頭観音」と刻まれている。

この道は古来秋葉神社参り・善光寺参りの人達が多く行き交う道で、秋葉道と名付けられていた。この道標は西に向いているが、道路工事によって位置も変り、東向きから西向きに変えられている。なお、下附近には、対岸の伴野「弁財天下渡し」に向かって船渡しがあった。



道標

東に向いているべきものが、工事によって西に向けられてしまった。位置も道路の西側より東側に移動している。



道標の遠景

# 16 天

## 白

二区

【所在地】市岡愛介氏宅地内

市岡家に氏神と併祀されている天白は、かつては出砂原の割烹「美佐登」の敷地の北側辺りにあったと言う。

出砂原の開発（道路・野球場などの新設）により、その姿を失うことの羽目となったが、永らく此の神を祀り世話をした市岡家に、地域に信望厚く、尚かつ地域の重責を担っていた福島庄太郎さんより依頼があり、「是非とも氏神に合祀し、今後とも末永く守り伝えていってもらいたい」と依頼され、現在に至っている。此の天白は惣兵衛堤防築堤の基点の一つともなっていた。（詳細記録は市岡氏と19年度役員が保管）。



天白

# 17 聖観世音菩薩像碑

二区

宝永8年(1711)建立

〔所在地〕大沢 操氏宅「お庚申様」境内内

観世音菩薩は阿弥陀如来の左に立つ脇侍である。地藏菩薩と並んで庶民に最も親しまれた菩薩である。

観世音は世の人がその名を唱える音声を観じて、その人の持っている苦しみや悩みを解決して下さる有難い仏様であると信じられていた。

信者が集まって講を作り、各所に信者による堂を造り信仰を深めるが、各所に造られる観音堂をお互いに参拝しようということから三十三観音巡拝が始まることになる。右手に持っているのは蓮の花である。

下市田間ヶ沢の清水庵(観音堂)は、伊那西国の三十三番所のうち、二十六番札所である。



聖観世音菩薩像



遠景

# 18 道祖神

二区

〔所在地〕福島家氏神境内内

道祖神は中国では「道路神」と言い、中国から入った信仰である。

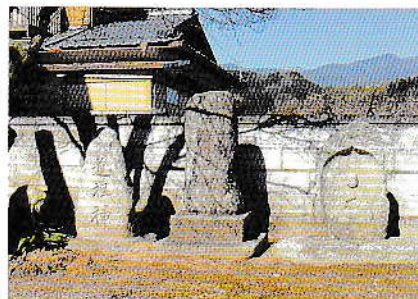
日本では「塞の神」として、悪の人って来るのを防ぐと信じられ、道端に建て悪霊の侵入を防いだり、道路や旅人の安全を守ったりするとされてきた。また、良縁、子孫繁栄の神ともされてきた。

なお、日本では古くから、賽の河原の神として幼くして亡くなった霊の守護神として、冥土で彷徨う幼子の霊を慰め救って下さるとして、信仰されていたようである。

道祖神には、文字を刻んだ碑と、男女双体の道祖神像を刻んだものがあり、安曇地方には多く見られるが、高森には大島山に一基ある。



道祖神



19 金毘羅大権現碑 二区



金毘羅大権現碑

天保13年(1842)建立  
【所在地】上原 修氏宅前「秋葉様境内」内

金毘羅大権現そのものについては、四区の説明文参照。  
この塔は秋葉塔建立後に、秋葉塔の南隣りに建立された。

20 秋葉大権現碑 二区



秋葉大権現碑

享和3年(1803)3月吉日 建立  
【所在地】上原 修氏宅前「秋葉様境内」内

※秋葉大権現そのものについては二区の説明文参照。  
1803年に建立したが、北隣の蚕玉様と見比べた時、その碑の余りの見劣りを感じた地区の人たちは、石積みが高くし均衡を保った。けれども、いま見比べても寛大さから言えばやはり蚕玉様には勝てない。

秋葉様境内



21 金山彦尊神碑 二区



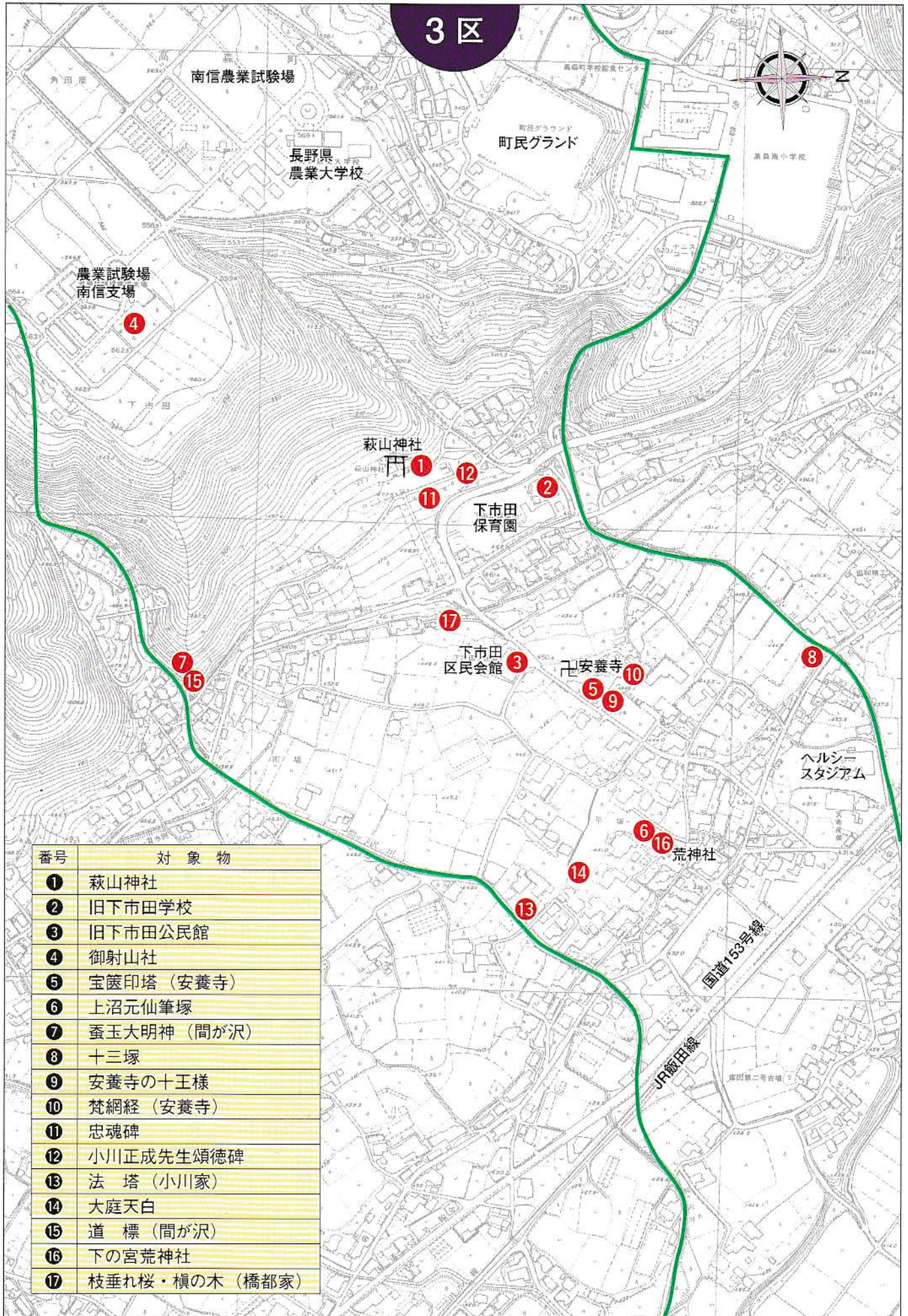
金山彦尊神碑

嘉永元年(1848)9月建立  
【所在地】上原 修氏宅前「秋葉様境内」内

(倉澤寛子氏所有)

鉄製品を造る職人を保護し、商売の繁盛をもたらす神様。金山彦神は金山姫神と共に金山を協同で経営して荒山(精錬しない金属)から剣、鏡(鉄製)その他金属器を鑄造する技工を守護とする神である。そのために、同じような職に就いている人々(鍛冶職)の信仰が特に厚い神である。

# 3区



# 1 萩山神社

〔三区〕

〔所在地〕古瀬

○諏訪神社（本殿） 祭神建御名方命。  
 本宮諏訪大社、創建は寿永年代（1182～1185）。松岡第4代領主帯刀が武運長久、領内平安を祈願するために、勧請したと記録されている。祠は室町時代の様式を具え極めて貴重な建造物で、町文化財に指定されている。



萩山神社拝殿

社殿配置図

荒神社 諏訪社 八幡社  
 拝殿



荒神社

諏訪社

○八幡社 祭神菅田別命（応神天皇）。  
 建立不詳だが嘉禎3年（1237）頃松岡氏は鎌倉幕府に奉仕参向していたので、源氏の崇敬の篤かった鶴岡八幡宮を勧請したと伝えられている。  
 ○荒神社 祭神素戔嗚命・三玉荒神。  
 延元3年（1338）、松岡城主、道山心公居士が安養寺建立の折、寺の守護神として三宝荒神を祀った堂（今の下の宮荒神社）であったが、明治40年（1907）内務省訓令により、大正2年（1913）萩山神社に遷宮合祀された。朱塗の社殿で室町時代（1392～1573）の作。祠は元禄時代（1688～1704）の様式を具え、貴重な建造で、町文化財に指定されている。

# 2 旧下市田学校

〔三区〕

〔所在地〕下市田保育園北隣

明治19年（1886）3月火災で焼失し、村民の熱意と協力により、明治21年（1888）2月竣工。その後改造されたが、明治中期以前の校舎は全国でも数少なく、貴重である。特に洋風に唐破風を配した中央玄関は珍しい。

昭和8年（1933）7月市田小学校（本校）へ完全統合された。その後、青年学校、戦後は下農高校の分校として使用した。取り壊しが計画されたが、昭和55年（1980）有志により保存会を結成し管理してきた。

昭和56年（1981）町の有形文化財に指定された。平成20年（2008）9月から屋根と白壁の大修理と内装ガラス戸など補修工事がなされた。



旧下市田学校



現 下市田保育園

### ③ 旧下市田公民館

〔三区〕前古瀬



旧下市田公民館



現在の区民会館

下市田区政、公民館活動の拠点として、昭和30年（1955）初めから区有林売却代金を基に区民総意により着工、34年（1959）10月15日竣工した。

体育館兼講堂、会議室兼結婚式場、集会室、研修室、図書室、調理室など装備して、当時近隣に見られない近代的建物で下市田の顔だった。

工事費は500万円余、工事請負は三六組。写真前面の田圃は現在、駐車場になっている。平成9年（1997）区民会館として全面改築した。

### ④ 御射山社

〔三区〕角田原



御射山社



角田原 御射山社の森

遠く古代、諏訪神社の祭神、建御名方命が八ヶ岳の原野で、青萱の穂で仮屋を葺き、宿舎として狩猟をしたことに起因しているといえられてきている。

時代は降って鎌倉幕府は全国の武將をこの神事に参加せしめ、故事に倣って騎射武芸を競わせた。参向した武將達は挙げて諏訪大明神の御分霊を拝戴して、自領地内に分社を奉斎した。それに併せて御射山神事が迎えられた。

当時御射山社は、松岡氏第四代領主たきわ帯刀が、寿永年代に勧請し角田原に祀ったのが始まりで、萱の穂屋を作り永々旧制を伝え、神事を守って今日に至っているのである。町の無形民俗文化財に指定されている。

⑤ 宝篋印塔 ほうきょういんとう  
三三三

室町時代(1392~1573年)推定  
【所在地】安養寺の墓地内



宝篋印塔



安養寺の宝篋印塔

墓地内に、松岡氏の供養塔として伝えられる高さ1メートルほどの宝篋印塔がある。相輪のうち宝珠及び請花(塔の最上段の円柱)を失っているが、室町時代(1392~1573)の作と推定される。また、中央の丸石二個は後世に入れたものではないかと言われている。安養寺開基の松岡貞景の墓塔とも言われている。

⑥ 上沼元仙筆塚 うえぬまげんせんふでづか  
三三三

天保3年(1832年)建立  
【所在地】荒神様の西隣、上沼清一氏の墓地内



上沼元仙筆塚

上沼家一族は江戸時代(1600~1867)、神主・医業兼手習の師匠であった。先祖、元仙に教えを受けた弟子が成長して、師への報恩に建立した。筆塚とは、もともと使った古い筆を、供養のため土へ埋めたところを筆塚と言った。また、弟子が師への報恩に建立した記念物も筆塚と言った。石碑に「当村手習子中」と刻まれている。

## 7 間ヶ沢の蚕玉様

三三三

嘉永5年(1852)2月建立  
 【所在地】間ヶ沢川端・間ヶ沢耕地  
 講中(間ヶ沢と四区北部)

養蚕業が盛んな頃は、毎年7月5日、講中の者たちが集い無病豊産を祈願し、碑前で持ち寄りのお肴重を拵げて講員仲間の親睦を図ったが、祭りも養蚕業の衰退と共に今は行われなくなつた。



間ヶ沢の蚕玉様(蠶玉大明神)



蚕玉様の遠景

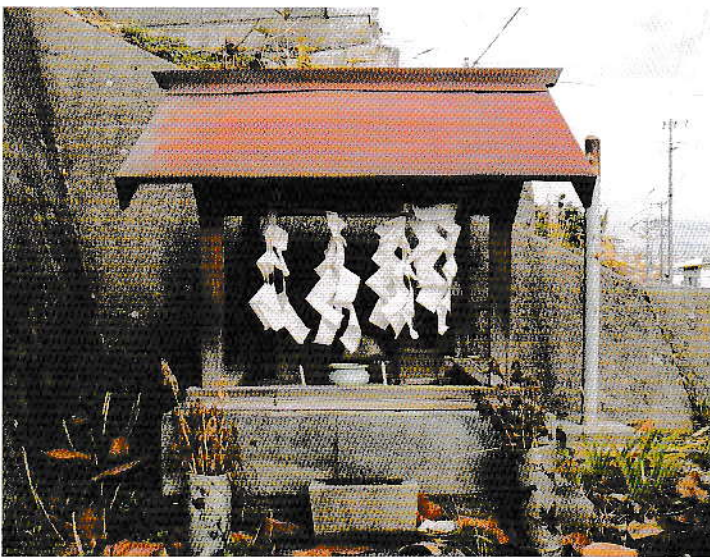
## 8 十三塚

三三三

【所在地】力東・上沼芳子氏宅裏上  
 坂牧義夫氏土地

十三塚は元は道路沿いにあつたが、道路拡幅の為め段丘の、中段に移動した。事の起こりは、天正10年(1582)織田軍勢が南方の吉岡城(下条)を攻め落とし飯田城にせまりつつあつた。

飯田城を守備した将兵は、勝ち目なしと城を脱出した一群が市田に來た折り、追いかけて來た織田勢と戦いとなり、飯田十名、織田三名、この戦いで十三名が死に果てた。武士たちの妄念が土地にしみ残つており永年の間には住む人々になにかと災厄を及ぼしたらしく、その魂を鎮めるため人々が祠を建てて祀っている。近くには古墳跡が散在しており、斬殺された十三名の慰霊のために古墳になぞらえて十三塚と呼ぶ習わしとなつた。毎年春、秋と二回祭事を行っている。



十三塚



十三塚の遠景

# 9 安養寺の十王様

あん よう じ じゅう おう さま

三三三

【所在地】安養寺境内の南口

南入口に十王堂がある。木像の十王様が安置されている。元は中村の大門（現在は新井庄一氏宅の所）にお堂があったが、江戸時代（1600〜1867年）の終わり頃、安養寺へ移された。江戸中期の作だが、作者は不明である。

十王経にもとづいた庶民信仰である。亡者は冥土（あの世）で、十王様に生前の罪を裁かれて、次の世は何に生まれ変わるか決められると言う。生前に供養すると罪が軽くなり、また亡者のために供養すると罪が軽くなると言われている。

十王様とは、秦広王、初江王、宋帝王、伍官王、閻魔王、變成王、泰山府君、平等王、都市王、五道転輪王（五道輪回王）である。

像の他に、人頭杖、浄玻璃の鏡、天秤等を象ったものが置いてある。

※一区の十王堂を参照する。



安養寺の十王様



十王堂

# 10 梵網経

ぼん もつ きよつ

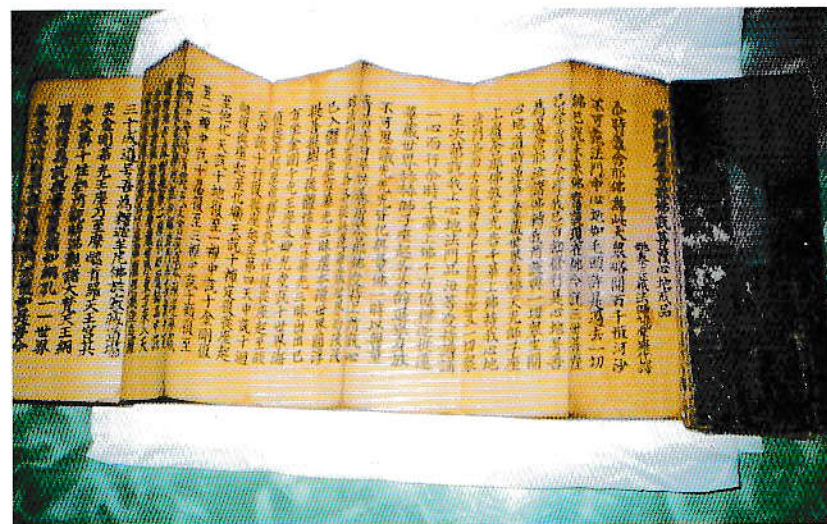
（町文化財指定）

三三三

【所在地】安養寺

松岡城主第九代松岡貞景が延元3年（1338）に安養寺を開創している。その貞景は元和3年（1354）に亡くなって、その三十三回忌の法要が行われた。

その時に、その子兵部小輔貞政は華嚴経、その他五部の大経二百巻を印刷刊行して、これを安養寺に奉納した。現在は上下二巻のみ安養寺に残され、この二巻には貞政自筆の奥書がされ、松岡氏、安養寺に関する最も貴重な文献である。



梵網経

⑪ 忠魂碑 ちゆうこん び  
 三三三

昭和5年(1930)4月建立  
 【所在地】萩山神社境内



忠魂碑

昭和3年(1928)下市田の在郷軍人会の発議により、各方面から多くの協力を得て建立に着手。下市田住民の勤勞奉仕によって建設され、昭和5年(1930)4月3日除幕式が盛大に挙行されている。  
 揮毫は、元帥伯爵 東郷平八郎(弘化4年(1847)〜昭和9年(1934))。碑文原本は表装しており、萩山神社所蔵で、平成20年(2008)12月から町の歴史民俗資料館に寄託保管されている。  
 毎年春と秋に萩山神社・下市田区・遺族会により、忠魂碑前庭において祭事が執り行われている。

⑫ 恩師小川昌成先生頌徳碑 しんとう とく び  
 三三三

昭和17年(1942)11月建立  
 【所在地】萩山神社忠魂碑東隣

先生の門人有志一同が建てた。題字の(頌徳)は、時の文部大臣従三位勲二等橋田邦彦氏の書である。  
 小川先生は安政2年(1855)松本に生まれ長じて、小川家の嗣子と成った。県内各地で教鞭を執られて、明治28年(1895)6月から大正4年(1915)3月迄、下市田学校長として郷党の指導に尽くされた。  
 この碑文は曾ての門人代表、市田村長松島喜代太郎氏の撰に依る。萩山神社宝蔵庫の裏に先生の教員住宅があつて、早春に親しんだであろう色濃く美しい八重紅梅が残されて、先生の遺徳を忍ぶ縁よすがとなっている。



遠景



頌徳碑

# 13 法塔

【三区】

【所在地】小川健三氏の墓地



法塔

建立は明らかでないが、寛永時代（1624～1644）の作とも伝えられている。

法塔は教典を供養した塔で、これを礼拝すれば罪は一時に消え、災害を免れ死後極楽に生まれ代わると言われた信仰があった。後世になって、墓塔または祖先の供養としても建てられた。

# 14 大庭天白

【三区】

【所在地】大庭・仲平真司氏宅裏

代表湯澤隆弘氏

豊川稲荷様をお迎えして、天白様として天地創造の神として、古くから信仰の中心となってきた古層の神である。

未来永劫に守護保存したい貴重な神社である。毎年3月28日には、赤い旗を立てて祭事を行っている。

※二区・五区の天白を参照する。

大庭天白



# 15 間ヶ沢の道標

【三区】

【所在地】下市田四区生活改善センター西にある道標から、松岡城の東麓を進んで来た古道が間ヶ沢川を渡った現三区の地点で、右と左に分かれる所。

建立は不明なるも、史記に依ると、第35代（642～645）皇極天皇（女帝）の代に勅命で、座光寺の本田善光に、「水内郡芋井の里（現長野市）へ如来を移せ」と告げられ、善光命に従って芋井の里へ遷座したとあるので、それ以後に、道中諸所に「せんこうじ道」の道標が建てられたものと推考される。

一方右の「原町」とあるのは、飯田から片桐の間宿場町で、一例を上げれば、信濃屋・扇屋・中野屋・高野屋・井桁屋・間屋・江戸屋・辰巳屋・榊屋・金屋・橘屋・萬屋・与津屋等々、宿や店が軒を連ねて、往来が賑わった所への標と思われる。先の戦争後まで、人等しく「原町」と呼んでいたことが思い出される。



間ヶ沢の道標

16 下の宮荒神社

【所在地】大庭



荒神社



荒神社遠景

荒神社の祭神は、素戔嗚命であるが、もとは延元3年(1338)松岡城主、道山心公居士が、安養寺建立の折り、寺の守護神として、三宝荒神を勧請した堂である。  
降って、明治40年(1907)に内務省訓令に依り、大正2年(1913)萩山神社へ遷宮合祀されたが、疫病発症に依り郷民の協議の結果、大正14年(1925)新殿を造営。上社から分霊奉祀して、今日に至って居る。

17 枝垂れ桜・槇の木

【所在地】

登録文化財指定天然記念物

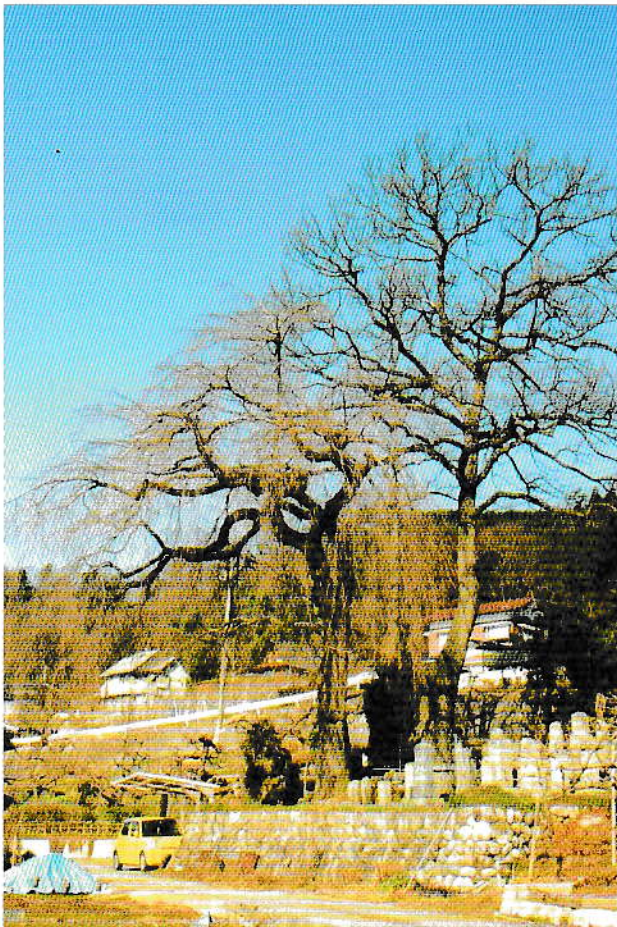
【所在地】萩山神社前 橋都家の墓地内

日本花の会の森田和一氏の要望により、飯田市北方の文吾林造園の樹木医原孝昭氏により診断を受ける。

その結果、樹齢五百年はあったであろう老木の、実生より発芽した二世であるが、二百年以上であると聞かされており、古木の多い郡下の中でも優れた老木であり、適切な保護・保存を行うよう要望された。・・・とする診断結果が報告されている。

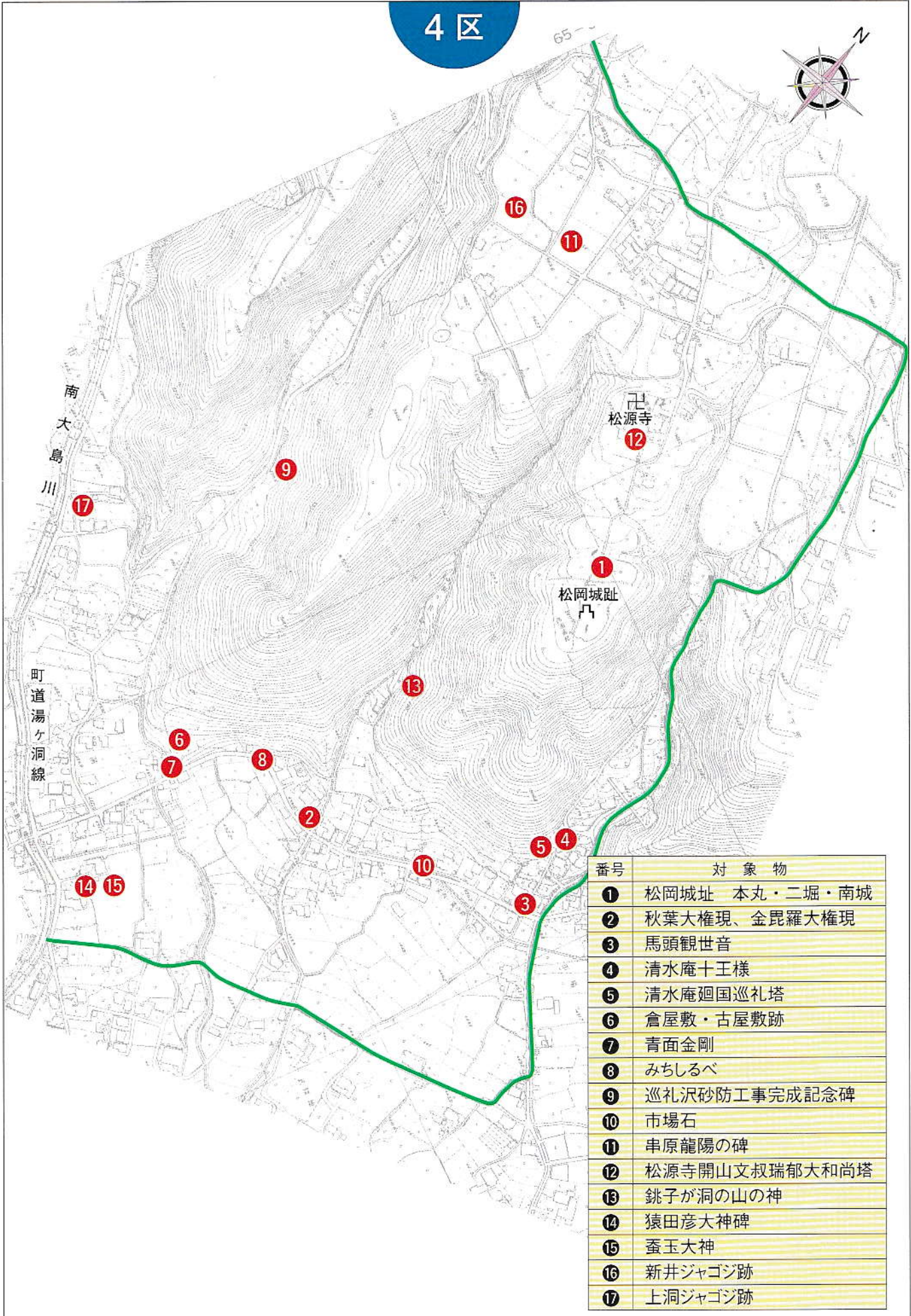
追記

同じ墓地内にある槇の木は桜より更に樹齢を重ねた古木で、保護・保存するよう要望されている。



枝垂れ桜と槇の木

# 4区



番号	対象物
①	松岡城址 本丸・二堀・南城
②	秋葉大権現、金毘羅大権現
③	馬頭観世音
④	清水庵十王様
⑤	清水庵廻国巡礼塔
⑥	倉屋敷・古屋敷跡
⑦	青面金剛
⑧	みちしるべ
⑨	巡礼沢砂防工事完成記念碑
⑩	市場石
⑪	串原龍陽の碑
⑫	松源寺開山文叔瑞郁大和尚塔
⑬	銚子が洞の山の神
⑭	猿田彦大神碑
⑮	蚕玉大神
⑯	新井ジャゴジ跡
⑰	上洞ジャゴジ跡

# ① 松岡城址

昭和17年(1942)1月22日石碑建立  
 【所在地】松岡城趾本丸先端

史跡松岡城趾として、昭和17年(1942)長野県の指定をうける。

昭和26年(1951)、現行の文化財保護法が施行された時点で申請がなされず、現在にいたっている。

昭和62年(1987)10月12日高森町文化財に指定。



松岡城趾

## ■松岡氏の初祖

前九年の役(1057)で陸奥(青森県)の豪族であった安部頼時は源頼義に敗れ、その子貞任も長子千代童子と共に、康平5年(1062)捕えられて殺され、阿部氏の乱は平定した。

その時、貞任の二男仙千代は乳母に抱かれて逃れ、下野に潜み信濃大町の仁科氏を頼るなどして、平安期に伊那郡市田郷の牛牧に漂着し、後に郷民に押されて地頭となり、松岡氏を名乗って吉野朝(1333~1392)の頃より勢力を振るい、戦国時代には武田80騎の将として、竜西では小笠原氏、下条氏に次ぐ雄となった。

安土桃山期(1573~1599)の半ば松本城主小笠原貞慶の誘いに乗り、高遠に出兵するが戦わず帰る。このことを家臣の密告によって徳川方に押さえられ、対決の結果申し開きができず、500余年続いた松岡氏も、天正16年(1588)改易となり家名断絶し滅亡となった。

## ■松岡城の築城

地頭となった仙千代は松岡貞則と名乗り、平安末頃上市田の一本杉近くの、現在の「古城」に居館を築いた。

松岡城の築城は概ね元徳元年(1330)の伊予守貞景の頃と推定される。



二の丸



二の堀跡

## ■二の丸

### 【所在地】松岡城趾

本丸の西には、東西約86~104メートル南北約21~30メートル、約25アールほぼ長方形の広場が二の丸である。三の丸とは土橋を挟んで二の堀がある。

堀の長さは北部約63メートル、南部約40メートルで、最も深い所で約40メートル、幅は約20メートルに及ぶところがある。

## ■松岡城趾・南城跡

### 【所在地】本城の南方

本城の約十分の一の広さで支城としては小さいが、本、二の丸、三の丸がある。



松岡南城跡

### 松岡南城跡遠景



② 秋葉山大権現・金毘羅大権現 [四区]  
〔所在地〕四区南沢



■金毘羅大権現  
海難、水難の神  
本宮 金毘羅神社(香川県琴平町)  
建立 天保3年(1832)

秋葉山大権現  
金毘羅大権現

■秋葉山大権現

防火の神

本宮 秋葉神社(静岡県春野町)

建立 文化4年(1807)卯歳3月

秋葉塔について多く見受けられるのは金毘羅塔である。同一碑石に秋葉山、金毘羅両神名が刻まれていたり或いは二碑が並立している場合が多い。金毘羅信仰は讃岐国象頭山にある金毘羅権現から発生した。金毘羅権現は仏教の守護神十二神将の一つである宮毘羅と、琴平に祀られていた金刀比羅(祭神大物主神)とが結びつけられた本地垂迹の名称である。金毘羅権現は海上の守護神として、航海、漁業などに従事する人々の信仰が特に厚かったが、海上ばかりでなく広く一般に交通安全の神として、旅立ちするものは金毘羅様に道中安全を祈願するようになった。



遠景

③ 馬頭観世音 [四区]

天保5年(1834)建立

〔所在地〕下市田四区 間ヶ沢

庶民信仰のなかで、一番多いのが馬頭観世音である。

馬頭観世音は恐ろしい怒りの姿で、馬を頭に頂くのは、インドの転輪王が馬に跨って四方を駆け巡り、一切の悪魔を打降するのを現しているという。

特に畜生類を救い導くので、この観音を信仰して馬の安全を祈り、馬が死んだときこの石仏を立てて供養するが、死んだ馬のためではなく観世音の感謝と供養である。



馬頭観世音

## 4 清水庵(観音堂)と十王様

〔四区〕

(建立時期 不明)  
〔所在地〕下市田四区間ヶ沢



清水庵

この観音堂(清水庵)は、千手観音を安置して庶民信仰の霊場として多くの信者を得ていた。

堂の創立の年代は不明であるが、伊那西国三十三観音のうち二十六番礼所として、多くの参拝者が訪れていた。

現在のお堂は松源寺の管理となっており大変老朽化してきており、中の観音菩薩像は、松源寺に移され安置されている。



十王様

十王とは冥府(冥土)にあつて、死者の罪を裁断する十人の王である。

人が死んで冥府に行くと初七日には秦広王、二七日には初江王、三七日には宗帝王、四七日には五官王、五七日には閻魔王、六七日には変成王、七七日には泰山王、百ケ日には平等王、一周忌には都市王、三回忌には五道転輪王の裁断を受け、生前の罪業の軽重が決定され、それにより各人の趣くべき場所が定められる。

※十王様については一区の十王堂、三区の安養寺の十王様を参照する。



千手観音

## 5 清水庵廻国巡礼塔

〔四区〕

元禄11年(1698)2月16日建立 〔所在地〕下市田四区 間ヶ沢

観音は現世利益の願いに答えてくれると広く信仰され、三十三ヶ所を巡拝祈願してその功德を得ることから、西国、坂東、秩父の霊場巡拝が盛んに行われ、また是を近い伊那に移し、伊那西国、坂東、秩父巡拝が行われ、その巡拝が無事終わって帰ると記念に廻国巡礼塔を建てた。但し秩父は三十四ヶ所。



廻国巡礼塔

## ⑥ 倉屋敷・古屋敷跡

〔四区〕

慶応元年(1865)建立

〔所在地〕洞 木村喜久雄氏宅前

山側の山中へ50m上に東西35m、南北25mの平地があり、松岡城に付属する穀物倉庫や家臣の屋敷があった。松岡時代とは関係はないが、この山中の屋敷跡に「富士山」と揮毫された高さ165cmの立派な碑がある。この碑の建立は慶応元年乙丑吉日(1865)となっており、これは近所の講中の人びとによる富士浅間信仰がかつて盛んであり、碑の裏側には羽生官兵衛を初め31名の名前が刻まれている。

時代は江戸末期から明治初期頃と考えられ、当時は富士山へ代参があったものと考えられるが、現在生存中の人の中にも知る人もなく、当時の記録も今のところ見つからない。



倉屋敷の石碑



古屋敷跡

## ⑦ 青面金剛

〔四区〕

元禄11年(1698)建立

〔所在地〕洞 木村喜久雄氏宅前



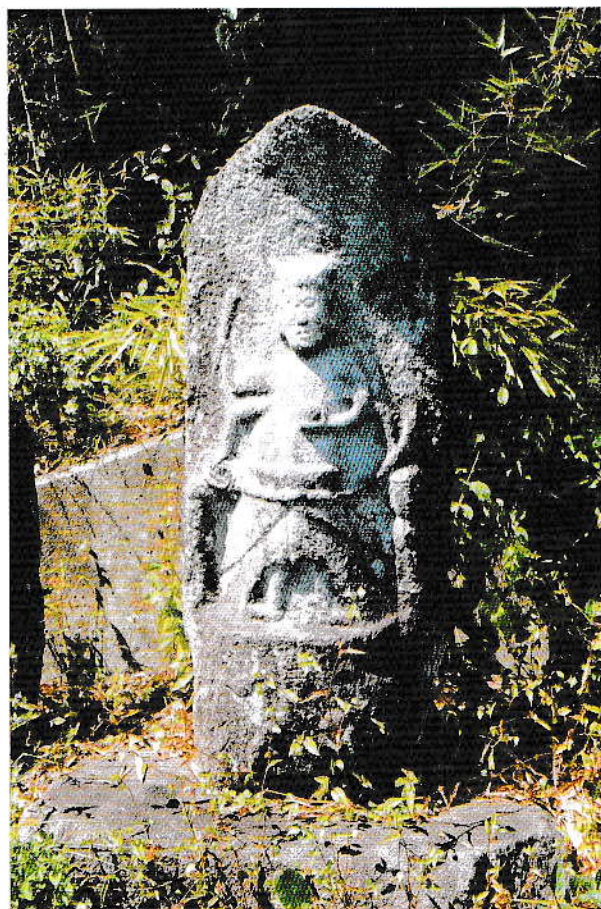
青面金剛の遠景

お庚申様の本体は青面金剛とされている。物凄い怒りの面相をして、右手に矛、剣、矢を持ち、左手に宝輪、弓のほかに赤ん坊を吊り下げているものがある。

両足で天邪鬼を踏みつけ、その下のほうに三猿(見ざる、聞かざる、言わざる)がうずくまっている。左右の地上には鶏の雌、雄を配してあるものもある。

また道路と結び付き悪鬼が村外から入り込まないように青面金剛の威力に頼った。村を邪悪から守ろうとする信仰である。

※二区の庚申供養碑を参照する。



青面金剛

# 8 みちしるべ

〔四区〕

建立時期 不明  
 〔所在地〕 四区生活センターの南

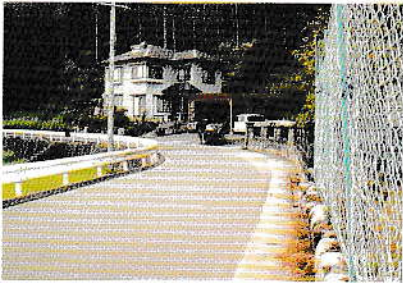


みちしるべ

四区生活センターの南に「左ぜんかうじ道」とのみちしるべがある。これは長野の善光寺に対するみちしるべとなっている。この道はこの地点から、新井川を渡り山側に入り、清水庵の下を通り間ヶ沢川を越えて、萩山神社の境内に至る。それ以北については唐沢原へのぼって上段地帯へむかう線と、清東を経て下段地帯を通る線が考えられるが、今では定かでない。



四区生活センターの南



# 9 巡礼沢砂防工事完成記念碑

じゆんれい さわさ ぼうこうじ かんせい きねんひ

〔四区〕



記念碑

県直営および補助工事荒廢地復旧工事  
 着工昭和7年（1932）、完工昭和14年（1939）  
 巡礼沢は黒沢川の水元で座頭なぎとともに崩落など  
 して下市田区民を悩ましてきた。  
 巡礼沢（元牛牧区有地）昭和13年（1938）下市  
 田区へ所有権移転。大正3年（1914）頃から管理  
 のために青年団に委嘱して草刈りを行う。  
 昭和3年（1928）下市田の管理に入  
 ることになった。



記念碑遠景



記念碑遠景

# 10 市場石

〔四区〕

〔所在地〕市場

清水伸彦氏の側



市場石

座光寺に古市場があり、下市田にも市場地籍に市場があった。  
これらの市場は当時の盛んな頃、地方の産物を持ち寄って売買したところである。いずれも東山道の道筋にあたりと言われ、交通量も多かったと思われる。

市場石の遠景



# 11 串原重松頌徳碑

〔四区〕

昭和11年(1936)丙子秋

〔所在地〕新井 串原実氏の西

串原 龍陽りゅうやうは本名重松、串原源三郎の長男、慶応3年(1863)10月12日現下市田に生まれる。明治15年市田小学校高等科卒業、同25年4月小学校教員免許を受け、以来飯島、飯田、下市田、東京大久保の各小学校へ奉職。明治25年6月中等教員養成所地歴科を卒業。同年長野県飯田高等女学校に勤務、地歴を担当。その後、岡山県矢掛中学校、新潟県立村松高等女学校に勤務。大正13年5月同校退職。功により正七位。

飯田高等女学校時代の同僚の木下蘇雲に絵画の指導を受け、安藤耕斎、池野晃雲、木下小麟、矢高涛舟、木下正州等の交友あり。弓道、囲碁、和歌をよくし、昭和27年4月8日、86歳で没した。



串原重松頌徳碑



頌徳碑の遠景

12 雲龍山 松源寺 〔四区〕

開山文叔瑞郁大和尚塔

臨濟宗妙心寺、創建1513年（牛牧寺山）、再興1678年（現在地）、

松岡城主 明甫正哲居士、開山は文叔瑞郁禪師

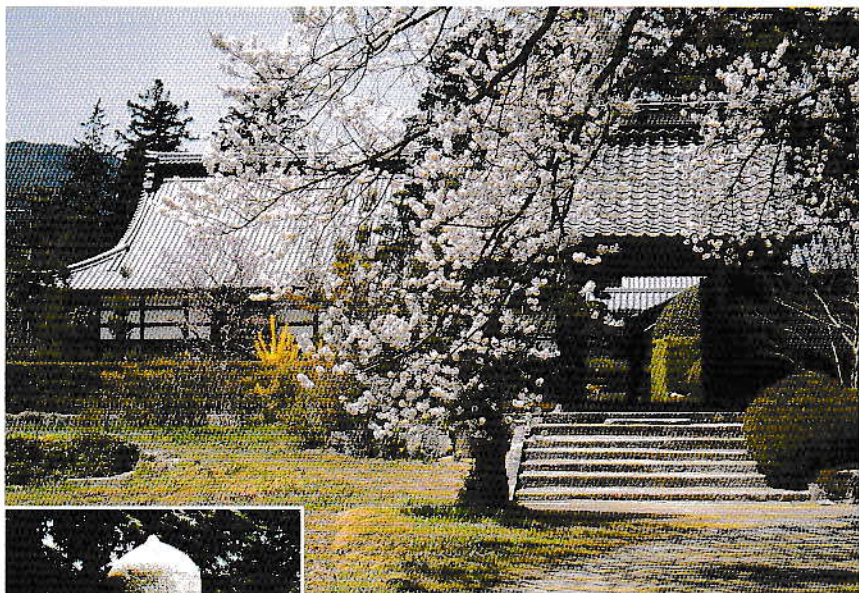
文叔瑞郁禪師

松岡城主第十二代貞正の弟として生まれ、僧として厳格な修業を重ね、四十二

才にて印可証明を得、郷里の松源寺、松尾の龍門寺、引左町の龍潭寺など開山し、四十九才にして勅命により京都の妙心寺の二十四代住持となる。六十九才に

て遷化される。

松源寺と龍潭寺を開山した法縁によって井伊直政の父直親の少年時代に松源寺（当時は牛牧に在る）に預ることになる。



松源寺の遠景



開山文叔瑞郁大和尚塔

13 銚子ヶ洞の山の神 〔四区〕

〔所在地〕 下市田4268の2 区有地

下市田四区市場地区松岡城址南沢登り口、ここに大山祇神をおおやまのみかみご神体とする山の神の祠がある。

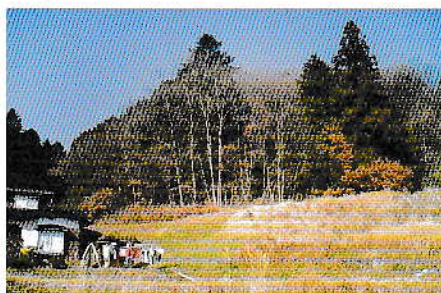
これは嘉永4年（1851）に銚子ヶ洞水系の四区市場、五区武陵地、中谷の購中の皆さんが建立以来、春秋彼岸の中日に銚子ヶ洞の山道作りを行い、山の神の祭りも執り行ってきた。

ところが近年道路改良が進み、山道の利用も少なくなつての古道が見捨てられ、昭和の高度成長期以降恒例となつていた山道作りが行われず、従つて山の神の祭典も中止され、最近はその山の神の祠がいたみ、境内が荒れ果てて今日に至つていた。

ところで平成十八年（2006）5月12日、有志により祠の更新と境内の整備を実施し、平沢神官によるお祓いを行い、日本古来からの庶民信仰を大事にし次世へ継承を誓ひ合った。



銚子ヶ洞の山の神の祠



山の神の遠景

14 猿田彦大神 〔四区〕

明治24年(1891)5月22日 木村末太郎氏建立  
 〔所在地〕下洞 上沼武雄氏のそば



猿田彦碑

国の神の一つ、ニニギノミコト降臨の際、先頭にたつて道案内をし後、伊勢の国五十鈴川上に鎮座したという。容貌は魁偉で鼻長身長七尺余と伝えられる。

日本書紀にはこれは俳優または巷の神とした。中世にいたり庚申の日には、この神を祀りまた道祖神とむすびつけた。

猿田彦大神は神道信者が祀った。  
 ※庚申については、五区の青面金剛を参照する。



15 蚕玉大神 〔四区〕

明治36年(1903)9月20日 木村末太郎  
 〔所在地〕下洞 上沼武雄氏のそば

伊那谷でも古くから養蚕が行われ、人間の生活を多く支え、お蚕様として大変尊敬され、蚕玉信仰も盛んに行われた。中部、東北地方の養蚕神の祭りは、多くの初午の日を中心として盛んにおこなわれ、現在では養蚕をやめても地域の安全、親睦のためにこの祭りに参加している。



蚕玉様の遠景



蚕玉大神

16 あらい  
新井のシャゴジ 〔四区〕

下市田には古くから手厚く祀られてきた古神に「三天白、三シャゴジ」があるという。新井シャゴジはその一つである。  
今は新井は小島、申原（榎原）同族の氏神となっている。

シャゴジについては、郷土学者はどんな神かわからないが、農業に関する神であることは確かであると語っている。

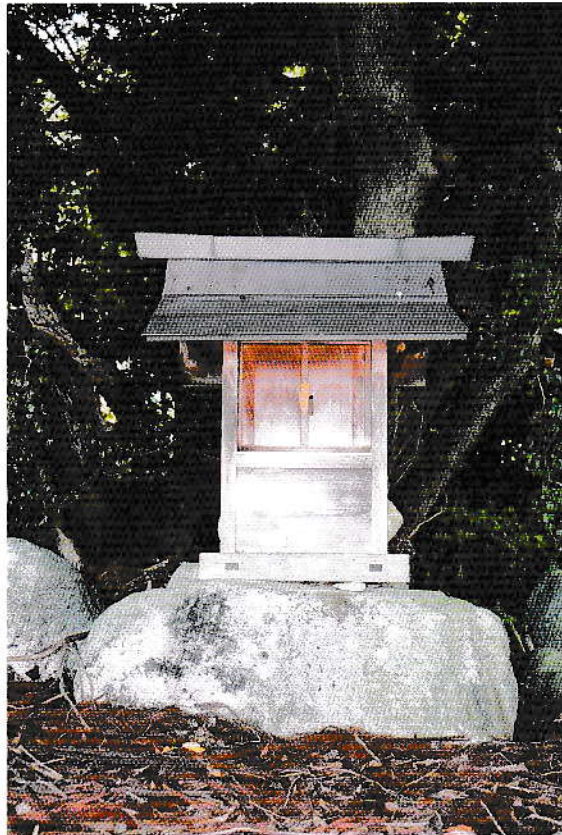


新井シャゴジの跡



新井シャゴジの遠景

17 かんぼら  
上洞のシャゴジ 〔四区〕



上洞シャゴジの跡

上洞シャゴジは座光寺境にある湯ヶ洞線沿いにある。

ここは、林家一統の氏神となっており、例年四月に氏神祭が行われている。

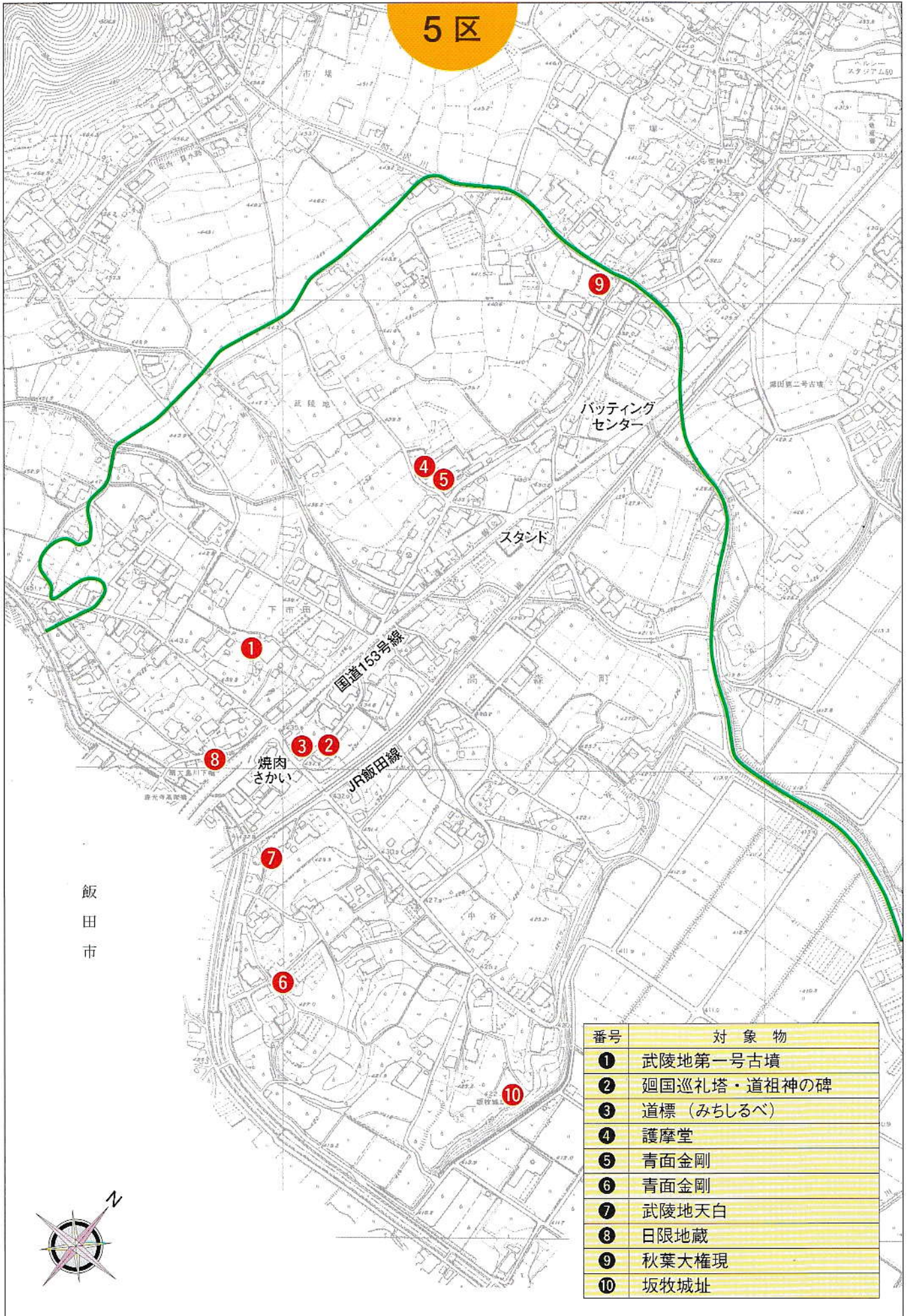
民俗学者柳田国男氏は、古い神で稲作信仰に関する神であることは確かかもしれないが、その名称から来る意味については、解釈が余りにも多く何を意味するのか、確かなことは理解できないといわれている。

大和政権時代から現在にまで至っているのではないかと語っている。

上洞シャゴジの遠景



5区



飯田市

番号	対象物
①	武陵地第一号古墳
②	廻国巡礼塔・道祖神の碑
③	道標 (みちしるべ)
④	護摩堂
⑤	青面金剛
⑥	青面金剛
⑦	武陵地天白
⑧	日限地藏
⑨	秋葉大権現
⑩	坂牧城址

# ① 武陵地第一号古墳

〔五区〕

〔所在地〕小川博志氏宅南



古墳上の石碑



武陵地第一号古墳の遠景



武陵地第一号古墳

武陵地第一号古墳の規模は高さ4.0m、奥行きは9.0m、底幅1.15mあり、その容姿は墳上に一位の老木がそびえ立ち、それらの樹下には数基の石碑が建ち並ぶ。

さらに古墳から出土した富本銭や副葬品の数々の評価は古くから高く、町内外から注目され、平成7年（1995）2月9日、高森町有形文化財の指定を受けることになった。

〔古墳上の石碑〕

- 秋葉大権現 寛政元年（1789）11月16日建立
- 金毘羅大権現 天保9年（1838）8月吉日建立
- 蚕玉様 嘉永4年（1851）

現在行われている秋葉大権現の祭祀については、一時途絶えていたものを（故）北林只人氏の提案により講人を集め、講人20余名によって行われている。

古墳から出土した富本銭

② 廻国巡礼塔・道祖神の碑 かきくじゅんれいとう どうそじん 〔五区〕



安政四年（1857）丁巳5月吉日  
棚田平三郎建立

〔所在地〕 久保田利明氏宅南

観世音は庶民に最も親しまれた仏で各地に観音堂が設立されるが、三十三観音に因んで、西国・坂東・秩父は三十四ヶ所がそれぞれ決められ、四国は八十八ヶ所になるが、これを全部巡拝することは容易ではないが、百八十八ヶ所の巡拝が完了すると供養のためこのような塔を建てた。



廻国巡礼塔・道祖神の碑のある風景

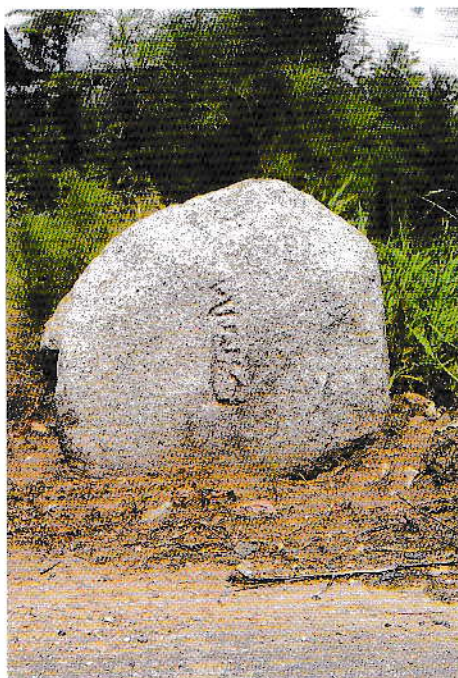
※道祖神については、二区の2-18（道祖神）の解説を参照。

③ 道標 みちしるべ 〔五区〕

〔所在地〕 久保田利明氏宅南

久保田利明氏が祖父（熊弥）から聞いた話では、確か明治の初め（明治2年〜3年頃）ぜんかうじにお参りに行く皆さんが道を間違えて座光寺のごんが清水方面に行く人が多く、そこで耕地（今の武陵地）の皆さんが手ごろな石を捜し石工に頼み「左ごんがしみず」と「右ぜんかうじ」の二つの道標を建てたそうである。

現在「ごんがしみず」の道標は行方不明である。



右ぜんかうじの道標

## 4 護摩堂ごまどう 「五区」

350年前(1658頃)建立  
〔所在地〕仲平信明氏宅横

乳木などを燃やし仏に供養祈願する密教(大日如来の教え)の秘法だと言う。その仏教を祀ってある堂である。祈禱師は大方の区域が決められており、法院様(ほうげんさま)と呼ばれ、区内の依頼者の祈禱に携わった。年一回、同家の者により氏神祭をしている。



護摩堂の内部



護摩堂



護摩堂と言面金剛遠景

## 5 青面金剛しょうめんこんごう 「五区」

(建立時期 不明)  
〔所在地〕仲平信明氏宅約10m前  
田村街道沿い

お庚申様の本体は青面金剛とされている。他に二区の庚申供養碑、三区の猿田彦命、四区の猿田彦大神等がある。庚申というのは、干支の庚と申の重なる日のことで、60日に一回まわってくる。

中国から来た信仰で、この夜眠っている間にその人の体内に居ると言う。三戸と言う虫がいて、この虫が飛び出しその人の悪事を天帝に告げると言う。そのため地域の人が集まって「青面金剛」を祀って寝ずに日の出を待つ。これを「お日待ち」といい、このような庚申信仰が盛んになると、お日待ちだけでなく「庚申供養塔」の建立にまで発展し、各所に塔が建ち、町内にはこの信仰に関係ある石造物は実に130有余存在するようである。



## 6 青面金剛しょうめんこんごう 「五区」

安永3年前(1774)5月建立  
〔所在地〕武陵地二原影氏宅の横

所有者は神奈川県に移住の林節子さん(元地元地主)。現在地に移転する前は久保田元治氏宅の北にあった。

所有者が遠方のため親戚一族が回り番で、年一回ずつの祭事を実施していたが、ここ数十年途切れている。(座光寺の親戚 古老 今村卓蔵氏に聞く)



# 7 武陵地天白

〔五区〕〔所在地〕宮下正實氏宅南

一口に海や川を鎮める神と言われている。また北極星、金星の総称でもあると言う説もある。天白神は養蚕の神、織物の神とも言われている。この他、天白神は川を鎮めるとも言われ、各地の川のある地域に多い。川の神であるがために龍神として祀られている場合もある。

天白の天は、倭朝に従った首長の称、白は、白羽神<sup>やましろがみ</sup>麻の種子を播き栽培を教えた神、星を祀り天狗をお使いとする呪いの術を中心とした信仰。とにかく古くからの先住民で、特定の人でも神でも無く、焼き畑農耕により生活。

天白信仰民は、原始農耕、原始漁労の人達であって、遺跡は原始狩猟民よりも山岳を下った海辺や河川に沿った位置に見られる。やがて水稻文化を持ち込んだミシヤグジ神を請け入れて共存共栄していた。始狩猟民<sup>はつしかり</sup>↓天白信仰民<sup>あましろがみ</sup>↓ミシヤグジ神信仰神、このような関連があるという。

天白については、種々の説があるが、定説はない。この地に神々がいつ祀られたか定かでないが、秋葉様がどうやら今の祀神の中心だという。(地元古老の話)

当時の地域の被害を防ぐために、河川の曲流の角に2トンと思われる巨石を敷き、数段積み重ね秋葉様を祀った(創設年号不明)。社庭面積二三反歩余り、周囲は大木の榎、杉、松があり、子供の格好の遊び場であった。昭和17年(1942)食料増産のため伐採。三六災害(昭和36年)後20体余りの氏神は三戸を残して自宅に持ち帰る。災害後社庭面積減少により、秋葉様周囲の石碑を現在の位置に集めた。



武陵地天白

# 8 日限地藏

〔五区〕〔所在地〕五区武陵地

今から130年前(1850年頃)、南大島川沿いに正直で働き者の一人の貧しい男の人が住んでいた。病気で亡くなる間に「お地藏様に祀って下さい」と言い、息を引き取った。

その後ある年、村に重病人が出て医者や祈祷師に見てもらったが、一向によくならなかった。ある晩病人の枕元に地藏様が立ったところ不思議と回復した。

以来今日に至るまで日を決めて祈願する人が多く、線香の煙の絶えることがない日が続いている。

例祭は春4月14日、秋10月14日に盛大に行われている。



日限地藏



日限地藏遠景

あきば だいごんげん  
**9 秋葉大権現**

〔五区〕 〔所在地〕 加藤敦子氏の北側

四石碑を総称して秋葉様と呼んでいる。  
 (加藤敦子さんから聞く)

秋葉大権現碑 天保2年(1831) 11月吉日建立  
 津島様 大正2年(1913) 4月建立  
 庚申様 不明  
 石灯籠 明治23年(1890)

秋葉様の祭事の講中員は約40名ほどいて、約20年くらい前まで、毎年3月16日と12月16日に実施されていた。これを復活しようと講中員から発案があり、平成21年度(2009)に秋葉神社(静岡県)へお参りし、普通りの祭事として実行する予定であるとのことである。



秋葉大権現



さか まき じょうし  
**10 坂牧城址**

〔五区〕 〔所在地〕 新井原東端下段の小台地

今から400年前(1585年頃)、天正の頃までは松岡城に付属する松岡八十騎の一人、坂牧氏を主とする出城であった。

この地からは東は天竜川を越えて林、供野(伴野)、阿島から神の峯にかけて、又南は座光寺、飯沼、松尾方面を一望におさめる。

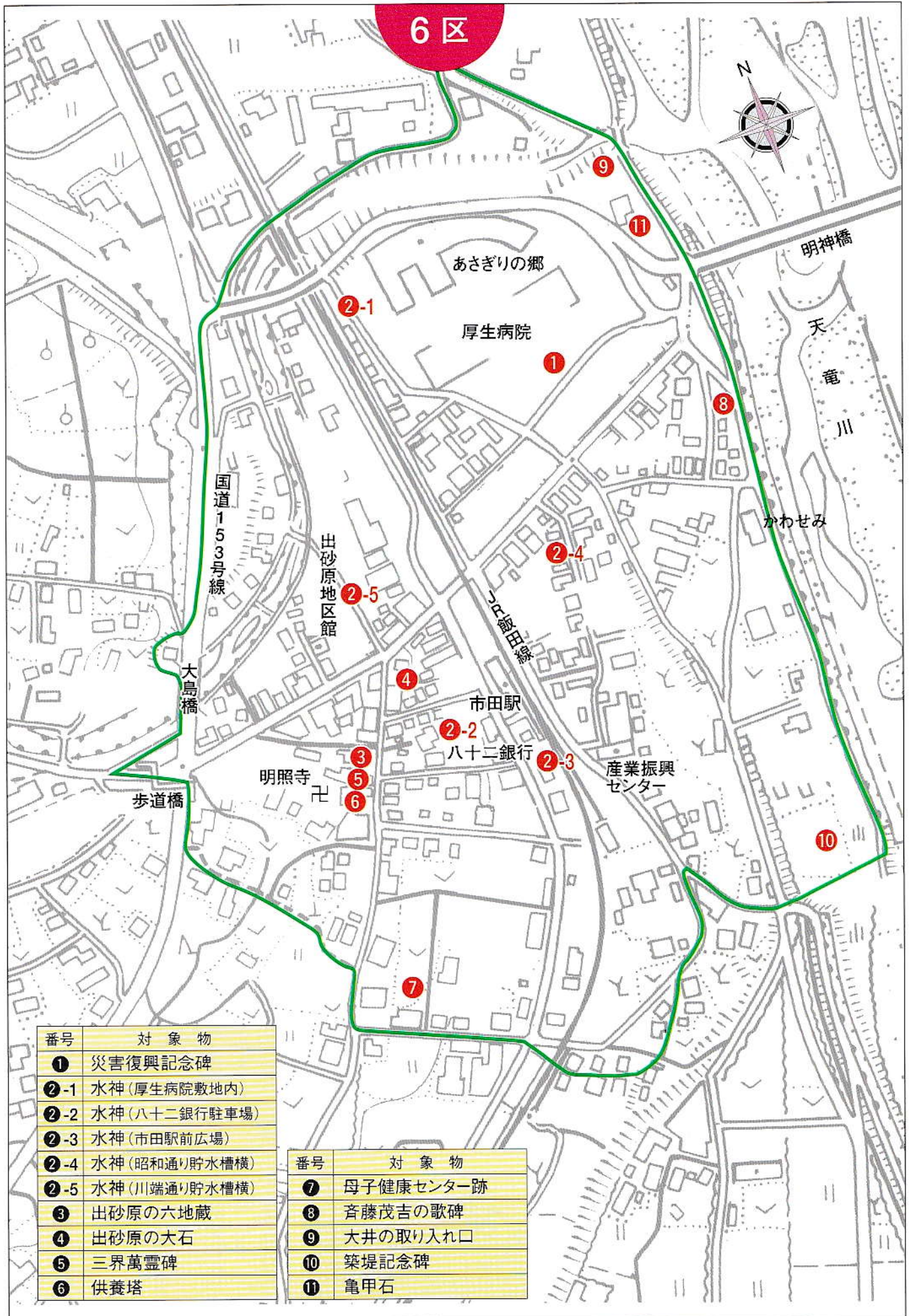
当時は、東に知久氏、南に小笠原氏が在り、それらに備えるには格好の見張りの場所であった。

城址には堀らしいものはあるが、不明で区画が判然としない。近くに坂牧氏の枯古墳がある。

尚、女中と馬の悲しい物語も残されている。



坂牧城址の遠景



番号	対象物
①	災害復興記念碑
②-1	水神(厚生病院敷地内)
②-2	水神(八十二銀行駐車場)
②-3	水神(市田駅前広場)
②-4	水神(昭和通り貯水槽横)
②-5	水神(川端通り貯水槽横)
③	出砂原の六地藏
④	出砂原の大石
⑤	三界萬霊碑
⑥	供養塔

番号	対象物
⑦	母子健康センター跡
⑧	斉藤茂吉の歌碑
⑨	大井の取り入れ口
⑩	築堤記念碑
⑪	亀甲石

# ① 災害復興記念碑 さいがいふっこうきねんひ

〔六区〕

昭和54年(1979)11月6日建立  
 【所在地】下伊那厚生病院中央の南側

昭和36年(1961)6月下旬の梅雨前線豪雨により、伊那谷は未曾有の惨禍に遭い、天竜社は大島川の決壊により壊滅的な大損害をこうむった。  
 この復旧には筆舌に尽くし難い困難を伴ったが、関係者が一丸となって復興に努めた結果、「転災為福」(災い転じて福と為す)を基盤に造成するに至り、ついに復興を成し遂げ、これを記念して建立された。



災害復興記念碑



復興記念碑のある場所

# ② 水神 すいじん

〔六区〕

【所在地】

- ① 下伊那厚生病院中央の南側
- ② 八十二銀行駐車場奥
- ③ 市田駅前広場
- ④ 昭和通り貯水槽横
- ⑤ 川端通り貯水槽横



② 八十二銀行駐車場奥  
昭和22年(1947)



③ 市田駅前広場  
大正14年(1925)



① 下伊那厚生病院敷地内  
昭和37年(1962)

この「水神」は県道バイパスの跨線橋の下、線路沿いの道路端、下伊那厚生病院のフェンスの中にある。建立は昭和37年(1962)で「三六水害」の翌年である。  
 かつて天竜社の敷地だった所で、再びこのような大きな水害がおこらないように、神に祈って建てられたものである。



④ 昭和通り貯水槽横  
昭和6年(1913)



⑤ 川端通り貯水槽横  
昭和10年(1935)

### ③ 出砂原の六地藏

〔六区〕

【所在地】出砂原 明照寺前



六地藏

正徳五年（1715）6月18日におきた「未満水」により、多くの犠牲者の供養のために建てられ、その傍らには「三界萬霊碑」も建立された。

六地藏はその後荒廃したため、約120年後の天保12年（1841）に再建された。

初代の六地藏は仏心の深い下市田、流田の二代福島九左衛門が亡くなった幼児の菩提を弔うために建立したが、「未満水」の際に押し流された。

現在、出砂原の大石の上に祀られている一体のお地藏様は、その時に寄進されたうちの一体で、流されずに残ったものではないかといわれている。

地藏は釈迦入滅以後、弥勒菩薩が人間界に現れるまでの間、人間界に現れ民衆を救って下さると言われ、路傍などに立って、道行く人の安全を守って下さるといふ。

六地藏は、「六道地藏」と言っており、六道の辻に立って救って下さるとされ、古くから信仰を得ている。

### ④ 出砂原の大石

〔六区〕

【所在地】出砂原 北部タクシー下段

「正徳五年 未満水」のあり、「不動滝」の奥から押し流されてきた石で、当初は現在の上の段にあり、「六地藏」と向き合っていた。

大正12年（1923）の鉄道開通とともに、駅前開発工事の際この石の根本まで掘ったために危険となり、今のところへずり落とした。この移転により石の上の地藏さんは「六地藏」が見えなくなり、それを悲しんで泣いたという。それで別名「夜泣き石」と言われている。



出砂原の大石



5 三界萬靈碑

〔六区〕〔所在地〕出砂原明照寺前



三界萬靈碑

「前亡後死三界萬靈碑」は「正徳の未満水」の後（年号不明）に建立された。正面の大きな文字の左右には、小さな文字で数行にわたり「未満水」の説明と、この碑の建立の由緒が刻まれているが難読である。碑文については以前に六区の故春日胤雄氏によって解説されているので、つぎに同氏による読み下し文を掲載する。

正徳5年（1715）6月18日、山も谷も淵も崩れ、墓地は水に流されてしまった。水没した墓の跡にのこったものを聚めて一つの丘を造つて弔う。どうか縁のあるものも縁なきものも、みな均しく仏の利益を蒙ることができるよう願うものである。（「秋の郷」第17号所載）

当時の下市田安養寺二世住職、了溪禪師の建立となっている。

6 供養塔

〔六区〕 天保13年（1842）壬寅正月  
〔所在地〕出砂原明照寺前

「三界萬靈碑」に並んで建てられている。碑の表面には「奉順拝西国（三十三所）四国（八十八所）秩父（三十四所）坂東（三十三所）供養塔」と刻まれており、側面には天保13年（1842）壬寅正月となっている。

もう一方の側面には願主上沼久兵衛母となっており、推察では亡くなった我が子の供養のために母親が寄進したものと思われる。年号からたどると「出砂原の六地藏」が再建された翌年（1842）に建てられたものである。



供養塔

供養塔のある近景



## 7 母子健康センター跡 〔六区〕

【所在地】出砂原下市田2071番地

母子健康センターは心身ともに健康な親子を守り育てたいとの婦人団体の強い要望によって、昭和37年（1962）8月に開設された。

昭和40年（1965）代には近隣の町村からも多くの利用者があり、出産も盛んで三名の助産婦さんが常駐するほどの盛況だった。

時代の変化により産婦が病院での出産を希望するようになり、次第に利用者が少なくなり保健事業のみとなったため、昭和56年（1981）3月ついに閉所となり、跡地には人家が何軒も建てられている。

開所から閉所までの20年間の出生者の数は、3,076名となっている。



母子健康センターの跡地

## 8 齊藤茂吉の歌碑 〔六区〕

【所在地】明神橋出砂原側

向こうより瀬の白波の激ち来る

天竜川におり立ちにけり



歌碑の全景

歌人の齊藤茂吉は大正15年（1926）11月6日、初めて伊那谷を訪れ、天竜川を眺めて感動し、この歌を詠んだ。この碑は以前、港公園に建てられていたが、明神橋のかけ替え工事により今の位置に移転した。

齊藤茂吉の訪れた日にちなんでこの日に建てられた。



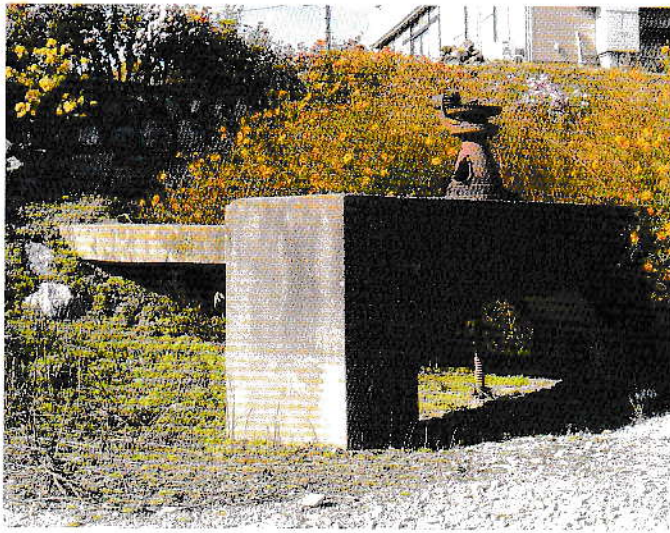
歌碑の遠景

# 9 大井の取り入れ口 おおい い 六区

【所在地】大島川出口のそば

昔から天龍川に沿った西側に、大島川の水を取水した大井があり、「小天龍間分」と言われていた。惣兵衛堤防築堤の絵図面には「上の亀甲石」のそばに「井口より」との記載があり、当時すでに利用されていたと思われる。

惣兵衛堤防はその後、しばしば改修されており、大正3年（1914）7月の水害で、この取り入れ口も決壊したため、大正3年（1914）9月より翌4年（1915）4月にかけて修復工事が行われた。これが「ださら堤防」といわれるもので、長さは約15m。この時に新しい取り入れ口も完成した。掲載の写真はその取り入れ口の水門で、その後、地形や水流の変化などにより、現在は使用されていない。



取り入れ口（間分）の全景



取り入れ口の遠景

# 10 築堤記念碑 ちくていき き ねん ひ

【六区】

大正4年（1915）建立



記念碑

【所在地】

下市田二区旧「水天宮」の横

別記「ださら堤防」竣工の記念として建立されたもので、碑の背面には工事の請負人として、大島虎太郎、野神喜子太郎、大澤米太郎、坂牧忠作、坂牧太金治、松島数太郎、松島平八郎以上七名の方々の名前が刻まれている。

# 11 亀甲石 きつ ここう せき

【六区】

【所在地】

明神橋上流水防小屋前

二区の「亀甲石」とともに、惣兵衛堤防築堤測量の基点となった。以前は天竜社の敷地内にあったものが、一家の民家の石垣に組み込まれていて、一部分だけが出ていたため、全体の大きさが不明だった。明神橋のバイパス工事により埋没の危機となり、当時の建設省へ陳情の結果、保存の措置がとられた。

現在は天竜河畔の水防小屋の前の空き地に保存されている。

また、表面が削られて刻字が不鮮明のため、下市田史談会では平成15年（2003）に二区のものゝ拓本にとり、業者に依頼して再刻し現在に至っている。



亀甲石



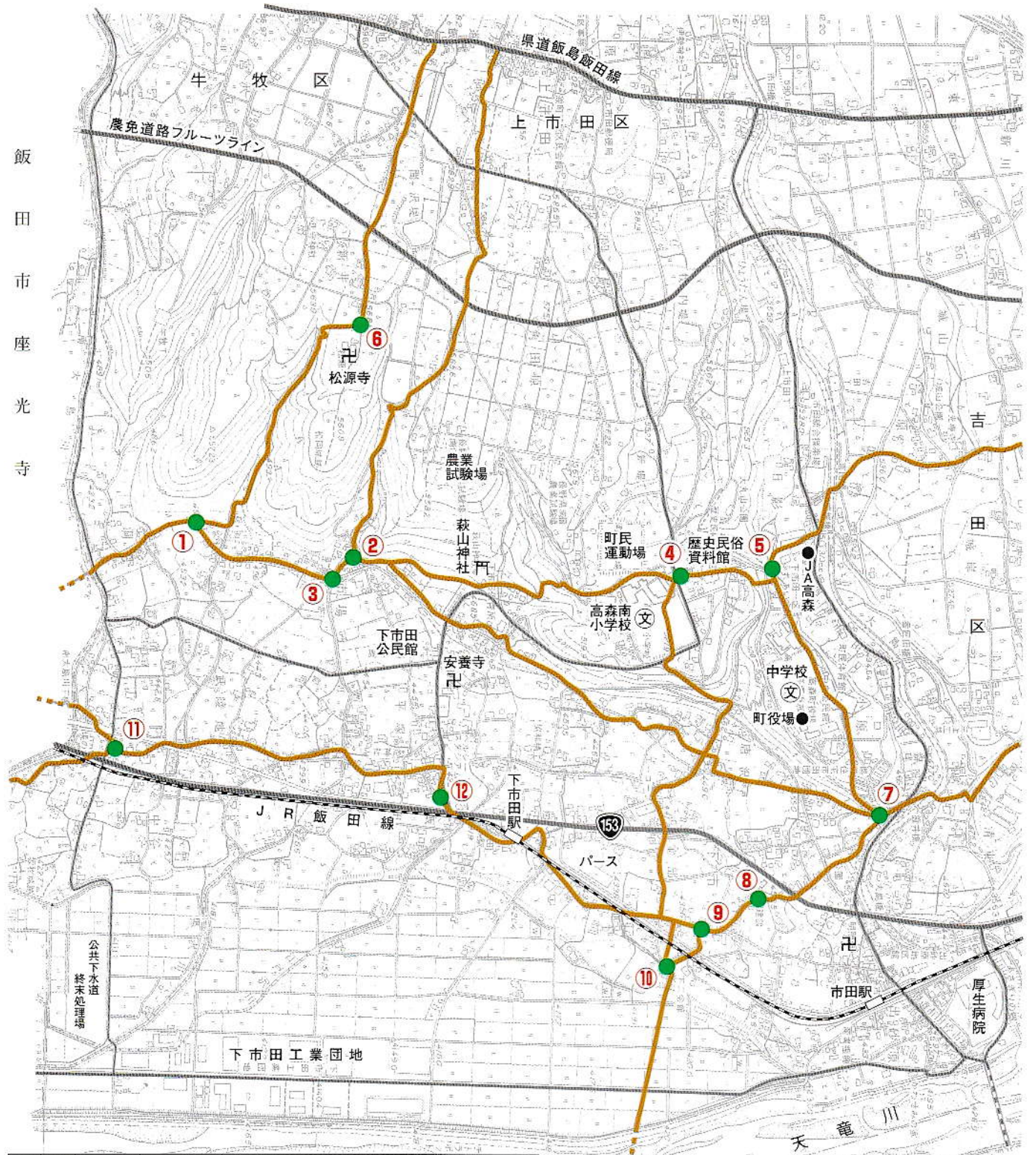
## 下市田の古道

### 善光寺道・秋葉道

古道と言えば東山道である。この道は阿智村神坂峠を降って駒場に出るが、ここから何処へ行くのか定かでない。座光寺から下市田へ入ったという説は多いが、証拠は不十分である。

秋葉道は古くから塩の道として、静岡県の相良から塩など海産物の入る道として有名であった。この道は幾度か分岐を繰り返しながら、その一つは、遠山上村から小川路峠を越え、知久平から豊丘伴野の船渡しを経て下市田へ来る。天竜川に沿った険しい山岳路でありながら極めて重要であり、国道一五二号線となっている。今は三遠南信自動車道の建設によって脚光を浴びている。

善光寺道は、難波津を訪れた本田善光が、阿弥陀三尊を持ち帰って今の元善光寺に祀るが、やがて長野の善光寺に移され、靈験あらたかな仏として多くの信者を持ち、遠くから訪れる信者のために幾箇所かに道標も見られる。



区	番号	場所	路線	碑文
4	①	南沢	善光寺道	左ぜんかうし道
3	②	間ヶ沢	善光寺道	左原町 右ぜんこうし道
3	③	間ヶ沢	龍西線	此方牛牧ニ至ル 此方吉田山吹ニ至ル 此方田村線ニ通ズ 此方飯田並八幡ニ至ル
1	④	唐沢原	善光寺道	北せんかう□ 東ふなど道 南さかう□
1	⑤	小原	善光寺道	北善光寺道 東舟渡道 □座光寺道 ※欠損部□は「南」か
4	⑥	新井	善光寺道	右元善光寺道 松源寺 左ぜんこうし道
1	⑦	塚越	秋葉道	左あきは道 右さかうし道
2	⑧	金部	秋葉道	左あきは道 馬頭観世音 大沢
2	⑨	金部	秋葉道	左あきは道 馬頭観世音 右いた道
2	⑩	下田	善光寺道	馬頭観音 右せんこう志道
5	⑪	武陵地	座光寺道	右さかうし
5	⑫	力行23	菰山神社	参道

● 道標のある場所  
 — 古道  
 - - - 現在の道



# 変わりゆく萩の郷



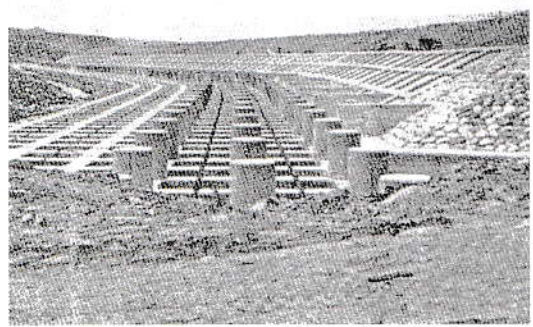
右端に見える塔は記念塔で、水害で流失し発見されていない。



昭和36年(1961)6月28日堤防決壊する(親水公園付近)。被害は流失耕地10ha、埋没耕地約500ha。



惣兵衛堤防の石積みが残り、その上に共に生きて来た桜も枯れて現在は朽ちた株だけが残されている。(ここは鍋づる堤防の内側になる)。左に供養塔が見える。これは流されなかったが、10m程西に移されている。



惣兵衛堤防の復旧工事 堤防総工費20億円。



惣兵衛堤防より80m内側に引き込めて新堤防が建設された。(親水公園の一角)水田8haが犠牲となっている。

## 惣兵衛堤防



惣兵衛堤防に下田の渡し(伴野の渡し)があった。滑車によって運行を助けていた。(上に滑車が見える)



堤防上の景観 昭和18年(1943)頃奥に供養塔が見える。

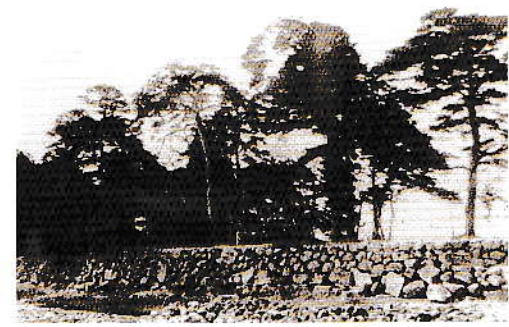


惣兵衛墓碑 (伊賀良)

大川除<sup>本</sup>(惣兵衛堤防)  
 正徳5年(1716)5月に発生した未滴水(ひつじまんすい)の時のよう  
 な、甚大な被害を防ぎ、水田の開発を目的とした堤防の建設に着目した飯田  
 藩主 堀親長は、黒須楠右衛門を工事奉行に命じ、石工に中村惣兵衛を工事  
 担当とし、寛延3年(1750)に着工し、宝暦2年(1752)に完成した。  
 堤防の規模 長さ146m  
 堤防での保護耕地 下市田100ha 上郷・座光寺150ha



昭和26年(1951)、県の史蹟指定を受け、翌27年(1952)4月に記念石塔を建て記念式典を行った。



災害前の堤防上の姿、水天宮もこの中にある。

この水天宮は本流に流され埋没していたが発見されて祀られている。



惣兵衛堤防の水天宮

# 市田駅周辺



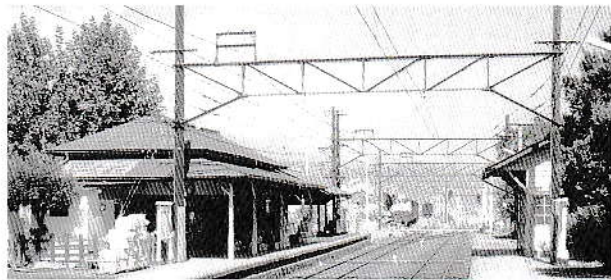
昭和末期の市田駅前の姿



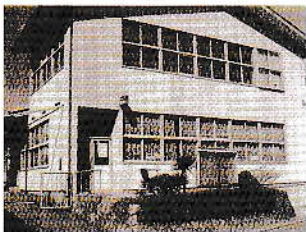
現在の市田駅前



改築前の市田駅の西口



改築前の市田駅



旧市田郵便局が2月19日に取り壊され昭和36年(1961)11月7日に完成した。ここでは当時上市田・山吹・神福の電話交換業務も行われていた。今は吉田に移されている。



出砂原の上の方にあった八十二銀行が駅前へ移転する。



昭和39年(1964)市田駅改築される。



農協Aコープ前の国道153号線。この右側にAコープが設立された。  
昭和40年(1965)5月13日北原台地上より撮影。  
きたのはら



昭和61年(1986)に農協Aコープが建設された。この敷地は下市田 雨製糸工場の用水の貯水池があった。  
カネイデ

# Aコープ下市田店



昭和37年(1962)、婦人会の要望により建設された母子健康センター。昭和57年(1982)廃止となり、寝たきり老人の一時預かりの施設となり、間もなく廃止となる。今は住宅地となっている。



母子センターの跡地に住宅が建つ。

# 母子健康センター

# 厚生連診療所に至るまでの経過



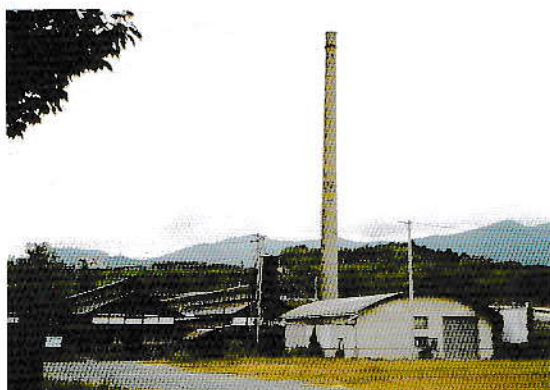
出砂原天竜社市田工場（昭和11年（1936）に操業始まる）



昭和4年 出砂原野球場完成（ここに天竜社市田工場が建つ）。



天竜社屋根まで土石流で埋まる。（三六災害）（昭和36年（1961））



昭和44年（1969）  
出砂原の天竜社市田工場閉鎖が決まる。



天竜社工場の撤去が始まる。



昭和61年（1986）、厚生連診療所が創設された。  
まだ煙突が残っている。



完成に近い厚生連診療所



製糸工場より新しく出発する準備をしている下市田支所。  
（この建物は今は無い）

大正3年（1914）、下市田  
共同組合市製糸工場が作られ、  
大正4年より操業。  
昭和11年（1936）に天竜  
社に吸収され、製糸工場は廃業  
になるが、農協下市田支所とし  
て現在に至る。

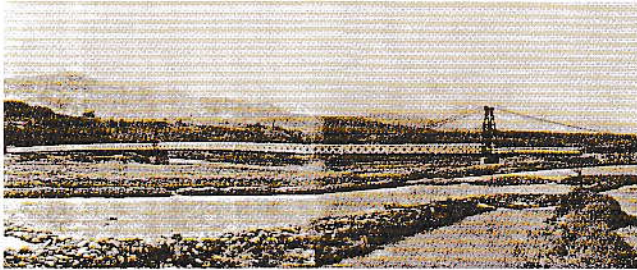
# 旧市田農協 下市田支所



現在JAみなみ信州高森ライスセンター



# 明神橋の変遷と出砂原堤防



当時の明神橋  
明治42年(1909)、田村の片桐良作の出資と、両地元の協力によって吊り橋として明神橋竣工する。



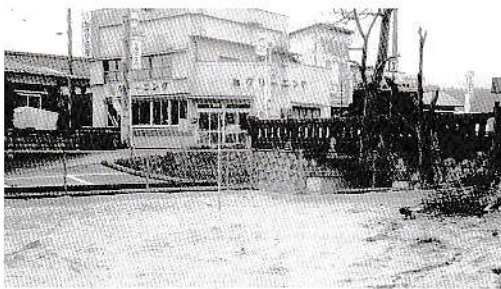
昭和7年(1932)、交通の急増により、ワーレン式曲弦鋼式による橋に架け替えられた。



完成した明神橋と間もなく取り壊されようとしている。  
旧明神橋(右側の橋)



平成8年(1996)、架け替えられた橋



明神橋架け替え前の橋の麓の姿  
(茂吉の歌碑はここにあった)



明神橋の左手前の小公園(茂吉の歌碑)



36災害以後、補強された出砂原堤防



天竜舟下りの市田港(出砂原堤防)  
後方の林は惣兵衛堤防



36災害後に補強工事されている出砂原堤防



橋の工事前の南の麓



橋の架け替え後の麓の変容

# 竜西一貫水路

一貫水路は水不足を補う極めて重要なことで、すでに明治20年（1887）頃から計画は進められていますが、昭和16年（1941）に着工し、以来28年を要し、昭和43年（1969）に中川村渡場から取り入れ天竜峡に至る大事業であった。



竜西一貫水路市田開渠（第三隧道前）

# 雲井橋付近



36災害時の雲井橋付近の惨状



現在の雲井橋付近

# 共中東北踏切の改善



昭和三十年（1955）代の踏切は、荷車かリヤカー位しか通行出来なかったが、今では大型トラックが自由に通行できるようになった。



完成間近い踏切辺りの工事

# J Aみなみ信州高森支所付近



昭和35年（1960）、町道中央線開通する（農協本所付近）市田駅より山吹までバス運行。



平成になつての農協本所付近、昭和33年（1958）新築される。



改善された現在の踏切



下市田学校〈明治21年(1888)新築〉、萩山神社の参道が向こうの林である。



下市田学校校舎移転記念〈明治43年(1910)〉



旧下市田学校西側、児童の玄関である。

明治6年(1873)、下市田訓蒙小学校として発足し、現在地に新校舎設立するも火災に遇い、明治21年(1888)に新築した校舎が現在の建造物で、当時建築した位置とは違い、明治末に現在地に移動し、若干の改造は行われてきたが、本体は当時のままで、貴重な建造物として町の文化財に指定されている。

## 旧市田小学校の変遷



窓の様子から、移動直後の学校と思われる。



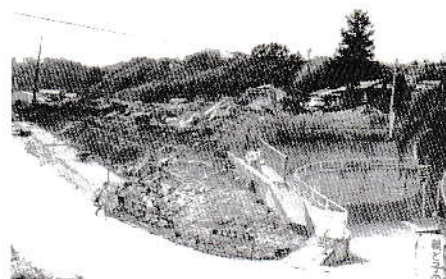
補習科の生徒の活動と思われる。



下市田学校の校舎を廃止し保育所となる。  
〈昭和56年3月(1981)完成〉



北の原方面



都市計画事業の一環として、県農業試験場跡地に建設予定の中央児童公園。



飯田方面へ



現在の歩道橋付近

西方 役場・公民館方面

## 出砂原歩道橋附近の変容

# 長野県農業試験場下伊那分場

農業試験場は大正末期頃に、当時の関係者の非常な努力により下市田に設立された。しかし三六災害で大きな被害を受け、昭和の末期に角田原へ移転した。



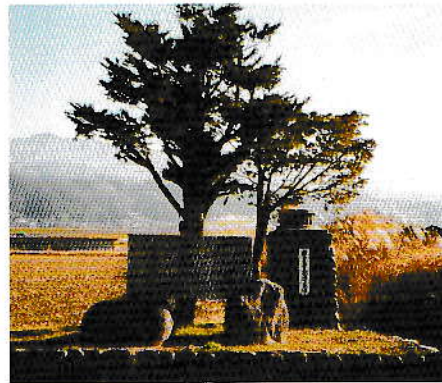
農事試験場の36災害の被害の状況(建物は試験場)



埋立も終わり、耕地化する直前(試験場附近)



前農業試験場跡地周辺の水田、遠方に柿畑もある。



移転した後に建つ記念碑



角田原に移った県農業試験場



試験場跡地に建てられた健康施設「あさざり」。

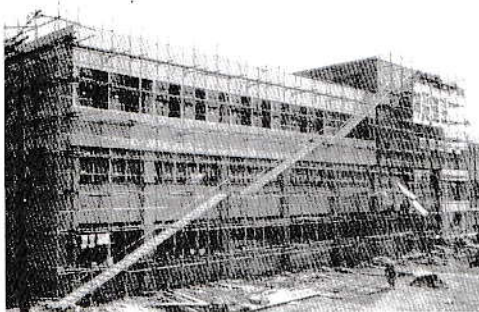
# 高森町役場の変遷

昭和21(1946)年に建てられてから30年、高森町の行政の中心として、あの大災害やいくつもの困難を乗り越えて来た。しかし、長い年月には勝てず、老朽化した建物は町制施行20年の年に現在の場所に建て替えられた。



この場所へ歴史民俗資料館が建設された。  
昭和54年(1979)に竣工する。

市町村立市田中学校が山吹中学校と合併し、新高森中学校を旧市田中学校の西方に移動して建設した。そのために、校舎を西方の畑に、校舎跡地をグラウンドに、旧グラウンドに役場福祉センター・中央公民館・体育館を建設した。



町役場建設中



町立体育館建設中

# 巨木・古墳・その他

天白神の祀られていた出砂原天白台地は、惣兵衛堤防の測地基点ともなっていたが、出砂原の開発と共に平地化され、現在の熊谷モーター通りが中心であったろうと言われている。

なお、この天白神の祠は市岡愛介さん宅に氏神と合祀されている。

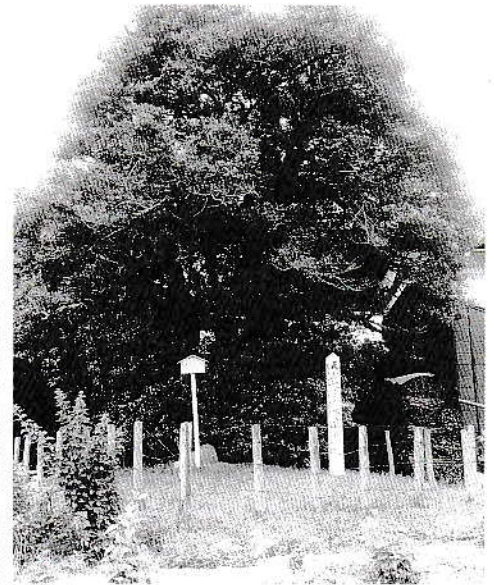
この天白の森は平にされ、住宅が建っているが、この熊谷モーターの裏の辺りから高台となって、当時の面影を偲ぶことができる。



熊谷モーターズ、この辺からやや西よりあたりに天白の森があったという。



親木は枯れ、新しい枝が伸びてきた(平成期)



県天然記念物下市田の柊(昭和期が最盛期)

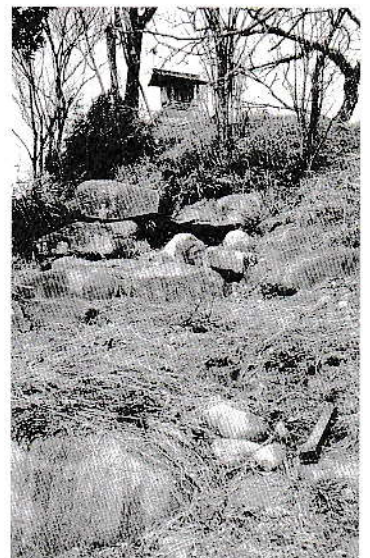


2区パーシモン会館(集会所)南側に生育していた柊、伐採されて今は無い。

下市田には多くの古墳があるが、この古墳は市田では最大で20m位の径で、有段式(二段式)で都下でも珍しく大切に保存したい。町では文化財指定をするため補修などとして準備を進めている。(平成20年現在)



畑中の塚(金部一号墳)二段式古墳



畑中の塚南入口

## 写真で残す『萩の郷』編集委員

(敬称略)

後列 (支館部員)

左から  
村上 英範 (1区)  
北沢 文治 (2区)  
新井 光浩 (3区)  
上沼 岩子 (6区)  
牧内 信子 (4区)  
藤田 和子 (5区)

前列 (区三役・支館三役)

左から  
福島 正夫 (区会計)  
龍口 平八 (副区長)  
林 稔 (区長)  
松岡 修二 (支館長)  
福沢 嘉言 (副支館長)  
上沼 芳子 (支館主事)



■下市田区・公民館下市田支館役員

後列 左から

上沼 祥 佑市彦  
田戸 純 市彦  
多田 敏 善 二郎  
北沢 善 正 幸操  
田大 沢 口 正 昭  
左から 昭 次 郎  
竹内 島 陸 逸  
福原 峰 二  
手塚 嶋 昭

前列 左から

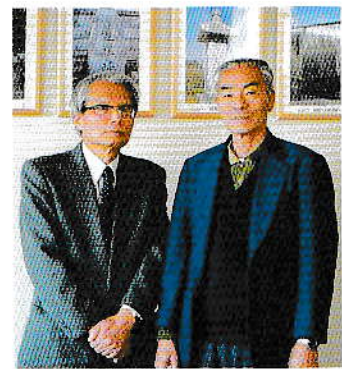
竹内 島 陸 逸  
福原 峰 二  
手塚 嶋 昭



■下市田史談会執筆担当役員

### 『写真で残す萩の郷』の編集にあたって

- 1、高森町史・石造物に関する専門書・郷土史家執筆書物・古老から等の聞き取り・資料館調査委員踏査資料・既刊書物など参考にした。
  - 2、同類のものについての説明の一部は、左記のようにした。  
例 秋葉大権現 (一区) 他区はこれに倣う「秋葉大権現そのものについては一区の説明文参照」と記した。
  - 3、碑等の名前については、碑に刻まれているそのものを基本とした。尚、像のみのものについては「○○像碑」とした。
  - 4、「十王」については諸説あるので、該当区毎の説明に委ねた。
  - 5、年号が判明しているものについては、年号の次に( )内へ西暦を加えた。
  - 6、本書物に収めた各区のものは、存在しているものの一部である。
  - 7、掲載順序については、一区から六区へと順を追った。
  - 8、道標は、「みちしるべ」との読みを統一した。
  - 9、数字と漢数字の使い分けは、常識にしたがった。  
(新聞記事の記述参考)
  - 10、地図は、町提供の5000分の1をそのまま使用した。
  - 11、地図上の境界は、概略である。
  - 12、個人所有のものについては、本人のご了解を得たうえ、掲載した。
- ※発刊に当たっては、努めて正確をきいたつもりであったが、調査や説明不足もあつたり、また校正段階での照合見落としもあつたりして、読者のご不満もあるかと思うが、ご理解のうえご容赦頂きたい。



左 片桐 猛 (三区)  
右 松島 義三 (二区)

■写真撮影担当



写真で残す●萩の郷

発行日●2009年3月31日  
発行●下市田区  
企画・編集●公民館下市田支館  
協賛●下市田史談会  
制作●ハヤシタイポグラフィ  
高森町下市田3708-1



写真で残す  
萩の郷